

泉南市遺跡群発掘調査報告書XVI

泉南市文化財調査報告書 第三十二集

1999. 3

泉南市教育委員会

序 文

私たちのまち泉南市は、ここ数年来、関西国際空港開港以降はとくに、その姿を大きく変貌させてきました。それは、一方では一定の経済効果を与え、私たちの日々の生活を物質的に豊かにし、過去に比較して格段に暮らしやすいものとしてくれました。

ところがその一方では、古代から残されてきた市域の豊かな自然や景観を大きく変質させ、過去のさまざまな文化を現代に生きる我々に見えにくいものとしてしまいました。埋蔵文化財の発掘調査は、まさにこれら先人の残した文化を知る最も近道と言えるでしょう。

本市では、先人の残した文化を後世に伝え、残してゆくという重責を果たすため、随時、発掘調査を行い、『泉南市遺跡群発掘調査報告書』として成果を公表させて頂いております。本書により、皆様には今年度の最新調査データをいち早く知って頂くと同時に、そこから垣間見る真の泉南市の歴史の姿を感じて頂ければ幸いと存じます。

特に今年度は、埋蔵文化財センター（古代史博物館）において国の重要文化財の海会寺跡出土遺物を公開するための特別展示室がオープンしました。

これにより、本市の宝とも言うべき海会寺跡出土遺物が常時、市民の皆様にご覧いただけることができるようになりました。これもひとえに皆様方のご支援の賜物と深く感謝申し上げますと同時に、今後は埋蔵文化財センターを核とした本市の文化財保護行政を強力に推進して行く所存であります。

最後になりましたが、今後とも関係諸機関の方々には、より一層のご協力、ご指導を賜りますようお願い申し上げます。

平成11年 3 月

泉南市教育委員会
教育長職務代理者
教育総務部長 金田 峯一

例 言

1. 本書は、泉南市教育委員会が平成10年度国庫補助事業として計画し、社会教育課が担当、実施した泉南市遺跡群の緊急発掘調査事業の報告書である。
2. 調査は、泉南市教育委員会社会教育課、仮屋喜一郎、岡田直樹、石橋広和、岡 一彦、城野博文、河田泰之、大野路彦を担当者として、平成10年4月1日に着手し、平成11年3月31日に終了した。
3. 調査及び整理の実施にあたっては、蔵田弘幸、蒲生徹幸をはじめ、石橋陽子、植田あゆ美、江尻美代子、奥田桂、小野祐子、門脇礼奈、片木大介、片木直幸、加茂大志、久我実希恵、熊田敬子、島津真理、庄司知嗣、岨野奈苗、田中みさを、富愛、中谷めぐみ、服部しげこ、福井元気、松本真規子、松本祐佳、真鍋紀美子、宮地江里奈、向林智与、村田純一諸君らの協力を得た。
また、広瀬和雄、向井俊生、芝野圭之助、有井宏子らの各氏からも有益な助言・協力を得た。記して感謝の意を表する次第である。
4. 本書の執筆は、石橋、岡、城野、大野が行なった。執筆の分担は目次に記した。
5. 現地調査における写真撮影は各担当者が行ない、出土遺物の写真撮影は石橋、城野が行なった。
6. 遺物実測は、江尻美代子、真鍋紀美子が行ない、トレースは、江尻が行なった。図版、挿図作成は、主に石橋、城野が行なった。
7. 本書の編集は城野が中心となり行なったが、一部仮屋、石橋が補佐した。
8. 調査にあたっては、写真・スライド等を作成した。広く利用されることを望むものである。
9. 本調査における出土遺物及び諸記録は、泉南市埋蔵文化財センターにおいて保管している。

凡 例

1. 各調査区には、個別の番号をつけている。番号の基本構成は、「遺跡略称（記号）－年度－通し番号」である。遺跡の略称は、男里遺跡－ON、光平寺跡－KH、長山遺跡－NG、戎畑遺跡－EB、童子畑遺跡－WR、本田池遺跡－HN、大苗代遺跡－ONS、岡田遺跡－OKD、座頭池遺跡－ZTである。調査年度をあらわす場合、元号年度は西暦年度に読み替え、上位2桁を省略して表現した。

なお本報告書では、報告文は遺跡毎に章だてしているため、基本的に各章中では遺跡名称を省略している。

2. 図中の方位は、PL. 1・2では真北を、各調査区位置図・地形図及びPL. 3では座標北を、第15図および各調査区平面図では磁北をあらわしている。

3. 本文および図版中に示したレベル高は、すべてT.P.+(m)の数値を使用しているが、T.P.+は省略している。

4. 遺構名称は、アルファベットと任意の数列の組合せで表している。アルファベットは、SD－溝、SK－土坑、SX－性格不明遺構、Pit－柱穴をそれぞれ表す。遺構番号は、2桁を原則として、1桁の数字の場合は、その前に0を付している。また、調査区毎に、遺構の種類別に通し番号を付している。

5. 断面図および立面図の位置は、平面図中に指示線とアルファベットによって示され、その場所が一致する。

6. 遺物実測図では、断面の表示を便宜上、土師器・陶磁器・土製品－白抜き、瓦（転用品を含む）－斜線のように塗り分けた。

7. 出土遺物の番号は、遺跡毎に土器、瓦の区別無しに通し番号を付した。なお、遺物実測図と写真図版では、遺物番号は統一している。また、同一写真図版内で複数の遺跡の遺物が存在する場合、番号の前に遺跡の略称を付している。

8. 遺物の出土量を表すのに用いたコンテナは、容積約27.5ℓのものである。

目 次

第1章 調査の経過	(石橋)	1
第2章 男里遺跡の調査		6
第1節 既往の調査	(大野)	6
第2節 98-1区の調査	(岡)	8
第3節 98-2区の調査	(城野)	8
第4節 98-3区の調査	(城野)	8
第5節 98-4区の調査	(城野)	9
第6節 97-7区の調査	(岡)	10
第7節 97-8区の調査	(城野)	11
第8節 97-9区の調査	(岡)	11
第3章 光平寺跡の調査		11
第1節 既往の調査	(大野)	13
第2節 97-1区の調査	(城野)	13
第4章 長山遺跡の調査		16
第1節 既往の調査	(大野)	16
第2節 98-1区の調査	(城野)	18
第5章 戎畑遺跡の調査		19
第1節 既往の調査	(大野)	20
第2節 98-1区の調査	(岡)	20
第3節 98-2区の調査	(城野)	21
第4節 97-17区の調査	(大野)	22
第6章 童子畑遺跡の調査	(石橋)	23
第1節 既往の調査		23
第2節 98-1区の調査		23
第7章 本田池遺跡の調査		27
第1節 既往の調査	(大野)	27
第2節 98-1区の調査	(城野)	27
第8章 大苗代遺跡の調査		29
第1節 既往の調査	(大野)	29
第2節 98-1区の調査	(城野)	29
第9章 岡田遺跡の調査		31
第1節 既往の調査	(大野)	31
第2節 97-8区の調査	(城野)	32
第10章 まとめ	(城野)	33
報告書抄録		巻末

挿 図 目 次

第1図	男里遺跡98-1区地形図	7
第2図	男里遺跡98-2区地形図	8
第3図	男里遺跡98-3区地形図	9
第4図	男里遺跡98-4区、97-8区地形図	9
第5図	男里遺跡97-7区地形図	10
第6図	男里遺跡97-7区出土の土器	11
第7図	男里遺跡97-9区地形図	12
第8図	光平寺跡97-1区地形図	13
第9図	光平寺跡97-1区出土の遺物	14
第10図	長山遺跡調査区位置図	16
第11図	長山遺跡98-1区地形図	17
第12図	戎畑遺跡調査区位置図	19
第13図	戎畑遺跡98-1・2区、97-17区地形図	20
第14図	童子畑遺跡調査区位置図	23
第15図	童子畑遺跡98-1区地形図	23
第16図	炭窯平面図及び立面図	24
第17図	炭窯出土の軒平瓦	26
第18図	本田池遺跡調査区位置図	27
第19図	本田池遺跡98-1区地形図	28
第20図	大苗代遺跡調査区位置図	29
第21図	大苗代遺跡98-1区地形図	30
第22図	岡田遺跡・座頭池遺跡調査区位置図	31
第23図	岡田遺跡97-8区地形図	32

表 目 次

第1表	平成10年度発掘および試掘調査届出一覧表	2
第2表	発掘調査一覧表	3
第3表	試掘調査一覧表	4
第4表	立会調査一覧表	5
第5表	文化財一覧表	36

図 版 目 次

- PL. 1 泉南地域の文化財
- PL. 2 泉南地域の地形分類
- PL. 3 男里遺跡・光平寺跡調査区位置図
- PL. 4 男里遺跡・光平寺跡調査区
- PL. 5 男里遺跡97-7区調査区
- PL. 6 長山遺跡・戎畑遺跡・本田池遺跡・大苗代遺跡・岡田遺跡調査区
- PL. 7 男里遺跡98-1・2・3区
- PL. 8 男里遺跡98-4区・97-8・9区
- PL. 9 男里遺跡97-7区①
- PL. 10 男里遺跡97-7区②
- PL. 11 光平寺跡97-1区・長山遺跡98-1区
- PL. 12 戎畑遺跡98-1・2区・97-17区
- PL. 13 童子畑遺跡98-1区
- PL. 14 本田池遺跡98-1区・大苗代遺跡98-1区・岡田遺跡97-8区
- PL. 15 男里遺跡・光平寺跡・童子畑遺跡出土の遺物

泉南市遺跡群発掘調査報告書Ⅵ

第1章 調査の経過

バブル経済の崩壊以降、長い経済の停滞期が訪れて久しいが、今年度は特に「平成大不況」と呼ばれる波が、発掘調査においても大きく現れた年となったことは間違いないであろう。このことは、市域における開発規模や件数をみれば明らかなことであり、ここ2～3年わずかに増加傾向にあった文化財保護法に基づく周知の遺跡内での土木工事等に伴う発掘届出件数を減少に転じさせた結果となっている。

しかしながら、これら不況を打開するために年度内にも予定される景気対策事業や困難な財政状況下であっても優先させることが決定している関西国際空港の二期工事など、開発の増加を予想させる事例は多々あることも確かであり、本年度の状況を下げ止まりと見るならば、むしろ今後、再び調査件数の増加も予想できなくもないことである。

このような状況下、今年度本市において第2表のとおり発掘調査が行われた。このうち本書の本文中において報告する遺跡数は8遺跡で、調査件数は全部で16件である。毎年の傾向であるが、今年度も大半を小規模な調査が占める結果となっている。

以下、それぞれの遺跡について調査の経過をみてみたい。

男里遺跡は、市域最大規模の遺跡である。他の遺跡同様に、今年度は調査件数が大幅に減少したものの、例年どおり本遺跡が、多く調査が行われた遺跡のひとつであることには変わりはない。今年度は5件の調査が行われ、このうち4件と昨年度未報告分と合わせて7件の調査を報告している。昨年度から特に顕著になったことであるが、今年度も小規模な調査が現在の男里集落内で多く行われることとなった。

光平寺跡は、全体が男里遺跡に含まれる遺跡であり、男里遺跡同様、ほぼ毎年調査が行われている。遺跡の立地上、個人住宅に伴う調査が多いが、近年には分譲住宅建設も多くあり、今年度は、昨年度未報告分1件の調査を報告している。

長山遺跡は、男里遺跡の東方、長山丘陵の縁に細長く立地する遺跡である。遺跡の形状や立地からこれまで3件の調査が行われただけである。今年度は、既往の調査に隣接した遺跡の縁辺部で1件の調査が行われた。

戎畑遺跡は、平成7～8年度にかけて遺跡のほぼ全域において区画整理に伴う大規模な調査が行われている。このため昨年度は、区画整理によって造成された宅地において住宅建設に伴う調査が集中し、男里遺跡を上回る調査が行われることになった。今年度は、かなり減少したものの、区画整理地内の宅地において2件の調査が行われ、昨年度未報告1件を合わせて3件の調査を報告している。

童子畑遺跡は、かつて分布調査において発見された遺跡である。根来街道、現在の府道泉佐野岩出線に面して立地する遺跡では、最も南に立地する。遺跡全体が独立丘陵であり、これまでまったく調査が行われることがなかった。今年度、初めて府道に面した部分で調査が行われた。

本田池遺跡は、市域中央の段丘面上という、遺跡の密度が最も低い地域に所在する。過去2件の調査

が行われているが、この数年はまったく調査が行われることがなかった。今年度は1件のみの調査であるが、急速に宅地化が進んでいる地域であるため、試掘調査などによって遺跡そのものが大きく変化する可能性がある。

大苗代遺跡は、平成2年度に本年度調査地に隣接する地域の開発に伴う試掘調査において周知された遺跡である。その後、この開発に伴う発掘調査を含めて4件の調査が行われただけであったが、今年度徐々に調査が行われた。

岡田遺跡は、男里遺跡に次ぐ市域第2番の規模を持つ遺跡である。発見以来、ほぼ毎年調査が行われていた。特にこの2～3年に調査件数が大幅に増加した遺跡のひとつであるが、今年度は調査は行われず、昨年度未報告の1件のみの報告に留まった。

第1表 平成10年度発掘及び試掘調査届出一覧表

平成10年12月31日現在

年 月	発 掘		試 掘		合 計	
	件 数	面積(m ²)	件 数	面積(m ²)	件 数	面積(m ²)
10年・1	4	2,490.51	5	5,360.93	9	7,851.44
2	1	260.66	3	185,965.72	4	186,226.38
3	3	1,166.15	1	364.44	4	1,530.59
4	2	1,241.55	3	7,162.65	5	8,404.20
5	5	1,209.56	0	0	5	1,209.56
6	4	503.42	2	2,384.04	6	2,887.46
7	3	739.88	1	1,432.57	4	2,172.45
8	2	404.22	3	2,604.07	5	3,008.29
9	8	971.29	3	5,856.67	11	6,827.96
10	3	4,016.59	1	456.77	4	4,473.36
11	2	10,427.82	2	4,595.73	4	15,023.55
12	8	2,266.74	0	0	8	2,266.74
合 計	45	25,698.39	24	216,183.59	69	241,881.98

第2表 発掘調査一覧表

平成10年12月31日現在

No	遺跡名	地区名	位 置	申 請 者	面積(㎡)	用 途	調査年月	備 考
1	男里遺跡	98-1区	男里		294.36	事務所	10年4月	本書掲載
2	男里遺跡	98-2区	男里		100.13	分譲住宅	10年9月	同上
3	男里遺跡	98-3区	男里		168.30	住宅新築	10年6月	同上
4	男里遺跡	98-4区	男里		165.00	住宅新築	10年10月	同上
5	男里遺跡	98-5区	男里		442.00	塙体改修	10年11月	現在継続中
6	男里遺跡	97-7区	男里		120.00	道路	10年1月	本書掲載
7	男里遺跡	97-8区	男里		38.19	農業用倉庫	10年1月	同上
8	男里遺跡	97-9区	男里		503.00	住宅新築	10年2月	同上
9	光平寺跡	97-1区	男里		260.66	住宅新築	10年3月	同上
10	光平寺跡	97-2区	男里		2136.68	宅地造成	10年3月	トレンチ4カ所設定したが遺構・遺物は確認されなかった。(PL3)
11	長山遺跡	98-1区	馬場		364.22	共同住宅	10年10月	本書掲載
12	戎畑遺跡	98-1区	樽井		126.91	住宅新築	10年10月	同上
13	戎畑遺跡	98-2区	樽井		135.08	集会所	10年6月	同上
14	戎畑遺跡	97-17区	樽井		302.71	住宅新築	10年3月	同上
15	童子畑遺跡	98-1区	信達童子畑		527.00	道路	10年7月	同上
16	座頭池遺跡	98-1区	樽井		2516.02	宅地造成	10年10月	トレンチ1カ所設定したが遺構・遺物は確認されなかった。(第22区)
17	本田池遺跡	98-1区	樽井		826.92	事務所・倉庫	10年4月	本書掲載
18	大苗代遺跡	98-1区	信達大苗代		414.63	住宅新築	10年6月	同上
19	岡田遺跡	97-8区	岡田		678.24	住宅新築	10年3月	同上

第3表 試掘調査一覧表

平成10年12月31日現在

No.	遺跡名	位 置	申 請 者	面積 (㎡)	用 途	調査年月	備 考
1	範囲外	樽井		461.76	宅地造成	10年1月20日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
2	範囲外	樽井		488.00	宅地造成	10年1月26日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
3	範囲外	信達牧野		1,219.79	宅地造成	10年2月6日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
4	範囲外	新家		18,731.86	老人保健施設	10年2月26日	トレンチ3カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
5	範囲外	新家		179,084.20	宅地造成	(第1次) 10年3月16日～ 10年3月31日	一部で遺構・遺物を確認した。 (新規発見遺跡 宮遺跡・宮南遺跡)
						(第2次) 10年8月3日～ 10年8月7日	トレンチ8カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
6	範囲外	馬場		2,996.81	店舗	10年3月24日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
7	範囲外	鳴滝		364.44	分譲住宅	10年3月31日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
8	範囲外	信達岡中		8,806.69	宅地造成	10年4月24日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
9	範囲外	樽井		2,066.49	宅地造成	10年5月7日	トレンチ2カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
10	範囲外	樽井		2,896.06	宅地造成	10年6月13日	トレンチ3カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
11	範囲外	樽井		998.34	分譲住宅	10年6月26日	トレンチ2カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
12	範囲外	樽井		1,432.57	分譲住宅	10年7月10日	トレンチ3カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
13	範囲外	岡田		1,385.70	自家用倉庫	10年7月28日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
14	範囲外	樽井		1,400.00	宅地造成	10年9月3日	トレンチ2カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
15	範囲外	岡田		494.16	寺院本堂	10年9月7日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
16	範囲外	信達市場		4,360.31	分譲住宅	10年10月13日	トレンチ2カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
17	範囲外	信達市場		2,200.10	宅地造成	10年10月20日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
18	範囲外	岡田		467.84	分譲住宅	10年10月22日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
19	範囲外	新家		368.61	共同住宅	10年10月27日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
20	範囲外	中小路		5,020.22	老人保健施設	10年10月28日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
21	範囲外	男里		709.91	工場及び倉庫	10年11月12日	トレンチ2カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
22	範囲外	樽井		467.84	共同住宅	10年11月16日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
23	範囲外	樽井		2,422.84	宅地造成	10年11月24日	トレンチ3カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
24	範囲外	樽井		2,172.89	分譲住宅	10年11月25日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。

第4表 立会調査一覧表

平成10年12月31日現在

No.	遺跡名	位置	申請者	面積 (㎡)	用途	調査年月日	備考
1	樽井南遺跡	樽井		165.51	住宅新築	10年1月13日	遺構・遺物は確認されなかった。
2	窪頭池遺跡	岡田		14.18	公衆便所	10年1月16日	遺構・遺物は確認されなかった。
3	岡垣池	信達六尾		213.00	堤体改修	10年1月20日	遺構・遺物は確認されなかった。
4	幡代遺跡	幡代		51.00	道路	10年1月26日～ 2月9日	遺構・遺物は確認されなかった。
5	芦谷池	信達市場		430.00	農業関連	10年2月2日	遺構・遺物は確認されなかった。
6	岡田遺跡	岡田		122.79	住宅新築	10年3月13日	遺構・遺物は確認されなかった。
7	岡田遺跡	岡田		114.26	住宅新築	10年3月13日	遺構・遺物は確認されなかった。
8	岡田遺跡	岡田		100.64	住宅新築	10年3月13日	遺構・遺物は確認されなかった。
9	岡田遺跡	岡田		102.31	住宅新築	10年4月3日	遺構・遺物は確認されなかった。
10	岡田遺跡	岡田		108.26	住宅新築	10年4月3日	遺構・遺物は確認されなかった。
11	薄金寺跡	信達大苗代		185.20	倉庫	10年4月3日	遺構・遺物は確認されなかった。
12	岡田遺跡	岡田		102.99	住宅新築	10年6月3日	遺構・遺物は確認されなかった。
13	岡田遺跡	岡田		100.48	住宅新築	10年8月18日	遺構・遺物は確認されなかった。
14	熊野街道	信達牧野		40.00	道路	10年9月16日	遺構・遺物は確認されなかった。
15	高田山古墳群	幡代		474.86	住宅新築	10年10月2日	遺構・遺物は確認されなかった。
16	光平寺跡 男里遺跡	男里		303.00	下水道	10年12月9日～	現在継続中。
17	根来街道	樽井		916.62	下水道	10年12月21日	遺構・遺物は確認されなかった。

第2章 男里遺跡の調査

第1節 既往の調査 (PL. 1～3)

男里遺跡は市域の西端を流れる男里川の右岸に位置し、その規模は双子池を中心として、東西約1.3km、南北約1.5kmを測り、市域では最大の面積をもつ遺跡である。地形分類においても、その大きさゆえ複雑な様相をみせており、遺跡の中央が旧河道、その東側には氾濫原及び沖積段丘面が、また西側には氾濫原と自然堤防が広がっている。

当遺跡が属する男里、馬場、幡代の集落一帯は市域でも最も開発が活発なところであり、それらに伴う調査が多数行われている。昭和初期に弥生土器が偶然発見され、報告^①されて以来、今日まで数多くのデータが蓄積され、さらに増加し続けているのである。以下に今日までの知見を述べる。

現在、最古の例としては遺跡の中心に位置する双子下池において採集されたナイフ形石器^②がある。単独での採集遺物であり、その詳細については不明と言わざるを得ないが、周辺に関連遺跡の存在を期待させるものである。

明確な遺構を伴うものとしては、北西部の氾濫原及び谷底低地上において、溝状の落ち込みより縄紋時代晩期の滋賀里Ⅲ～Ⅳ式の土器がまとまって出土している^③。また双子池から北に約25mの地点においてはピットなどとともに、突帯紋土器がまとまって出土している^④。これらのことから、当該期の活動が遺跡の北側を中心に行われていたと位置づけることができる。

弥生時代では前期の遺物が、遺跡のやはり北側を中心に若干見られるものの、明確な遺構を伴うものは少ない。しかし中期になるとその様相が一変し、近年実施された遺跡を南北に縦貫する府道新設に伴う調査においては、十数棟の竪穴住居や掘立柱建物からなる集落^⑤が確認され、また隣接する地点より複数の木棺墓^⑥などが確認されていることから、地域の中心的な集落であったと考えられている。しかし現在のところ集落に伴う生産域などは確認されておらず、今後の調査の進展に期待しなければならない。中期後葉になると再び様相が一変し、遺構、遺物の検出は極端に少なくなる。つまり先の集落は長くは存続しておらず、当遺跡から南東に約2km離れた独立丘陵に位置し、高地性集落と考えられる滑瀬遺跡^⑦などとの関連が注目される。

庄内式併行期から布留式期にかけて、近年継続的に調査が行われている双子下池では、当該期の多量の遺物を含む自然流路が検出された^⑧。また双子池より北西に約400mの男里集落内の調査においては、庄内式併行期の遺物を含む溝状の遺構が検出されており、遺跡の北西側に活動の中心が求められる。

6世紀代においても、前代から大きな変化は窺えず、遺跡の北西部において散布的に遺物が確認されており、また遺構としては6世紀後半の溝^⑩や小石室^⑪など、付近に集落の存在を示唆するような遺構が確認されている。

飛鳥～奈良時代にかけては、双子上池の北西隣接地において奈良時代の掘立柱建物が検出されており、先の双子下池の調査においては飛鳥～奈良時代にかけての自然流路も検出されている。その中には「しがらみ」を伴うものもあり、大規模な導水システムが導入され、周辺の開発が進んだと考えられている^⑬。また双子池より東北東に約200mの地点において、飛鳥時代の竪穴住居と掘立柱建物が隣接して検出されていることから^⑭、当該期には双子池で検出された自然流路を挟んで、両岸に集落が展開していたようで

ある。

平安時代には遺跡の北東部を中心に複数の掘立柱建物や廃棄土坑が検出されており¹⁵、隣接する戎畑遺跡において確認された大溝を築造した集落である可能性が考えられている¹⁶。平安時代末期～中世にかけての遺構や遺物は、遺跡全体に見られるようになり、この時期から大規模な開発が開始されたことが窺える。

中世以降には、現在もみられるように、集落と生産域とが明確に区別されるようになり、耕作地の集中による生産力の拡大が窺える。また当遺跡の西端に光平寺が建立されるのもこの頃であり、これらのことから、生産域の拡大、つまり庶民の経済力向上と、仏教信仰との間に密接な関係が存在していたものと考えられるのである。

近世～近代において特筆されるのは、昨年度、遺跡の北西部における調査でまとまって出土した「瓦漏」がある¹⁷。これは製糖の際に用いられたと考えられるもので、南に隣接する幡代遺跡などでも同様の製品が出土していることから、当時製糖が広範囲で行われていたことが明らかとなってきた¹⁸。

以上のように男里遺跡においては、多くのデータが蓄積されてきており、歴史的な内容についてもかなり明らかにされつつある。今後はこれらの「点」としての既知のデータを更に詳細に組み立て、「面」的な拡がりを追求し、歴史的「空間」の復元を行っていかなければならない。

第2節 98-1区の調査

1. 位置 (PL. 3、第1図)

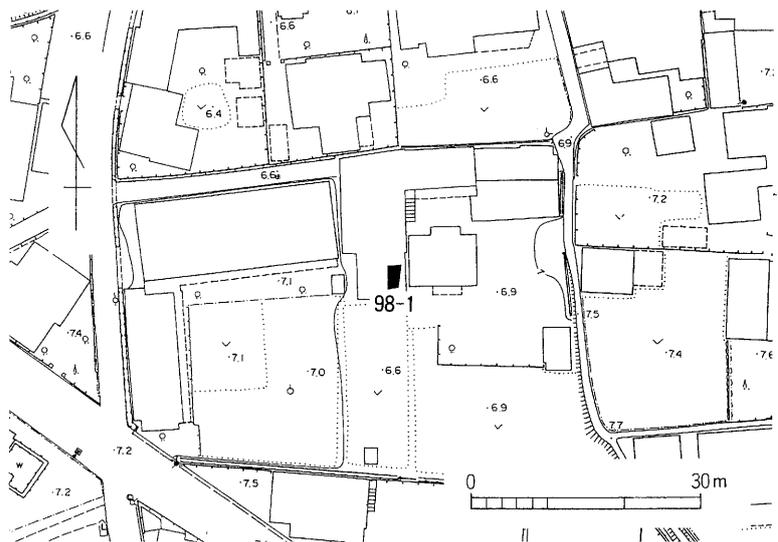
調査地は、遺跡の西端部、現在の男里集落の南西付近に位置し、地形分類上では氾濫原に立地している。男里集落内における過去の調査では、集落の西部や南西部では礫層や砂層の堆積が確認されており、安定した地山面の検出は数少ない。トレンチは1カ所設定した。

2. 層位と遺物の出土状況

(PL. 4・7)

層位は、第1層が旧耕作土(約20cm)

で、下層には拳大程度の円礫を含んでいる。以下は第2層・褐色混じり淡灰色土(約10cm)、第3層・灰色混じり暗褐色土(約20cm)と続く。第4層は非常に堅く締まった灰色混じり明褐色土(約20cm)、第5層が灰色混じり明褐色粘質土の地山である。地山面の標高は5.7m前後を測り、南側にむかって緩やかに傾斜している。遺物は第3層より瓦器の細片が出土しており、当層が中世の耕作土である可能性が考えられる。遺構は確認できなかった。



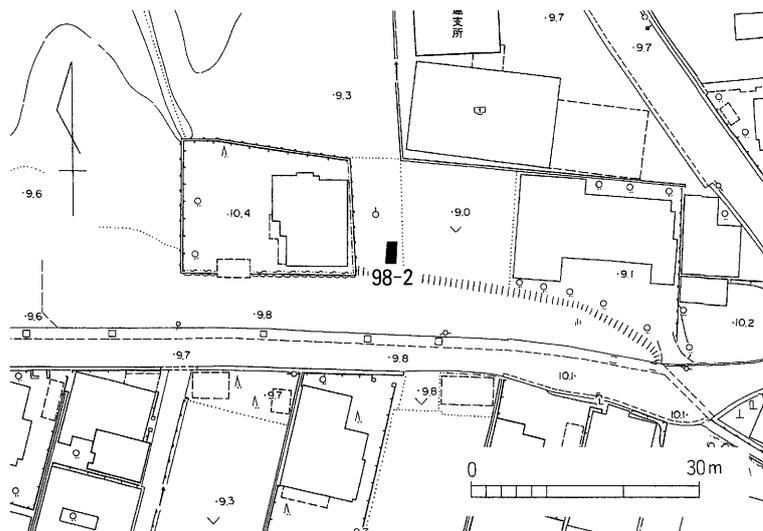
第1図 男里遺跡98-1区地形図

第3節 98—2区の調査

1. 位置 (PL. 3、第2図)

調査地は、遺跡の西端部、現在の男里集落の西端にあたる地点である。調査地の北西約100mで現在の光平寺境内へと至る。

地形分類的には男里川右岸に形成された自然堤防上に立地していると考えられ、つい十数年前までは調査地に南接して「霞堤」の痕跡が認められたところである。トレンチは1カ所設定した。



第2図 男里遺跡98—2区地形図

2. 層位と遺物の出土状況 (PL. 4・7)

約50cmの盛土を除去するとトレンチ南半部では暗黄褐色砂質土、黒灰色混じり暗黄色土、暗橙色混じり灰褐色砂質土、暗黄色砂質土、暗灰黄褐色粘質土の各層がいずれも北から南へ向かってレベルを下げながら堆積している。これらの中には暗茶褐色混じり灰褐色粘土がほぼ水平に堆積し、暗青灰色砂礫の地山に至る。トレンチの北半部では盛土直下に暗黄褐色土が確認され、そのまま暗茶褐色混じり灰褐色粘土および暗青灰色砂礫へと至る。地山面の標高は8.6mを測る。またこれらのうち暗茶褐色混じり灰褐色粘土と地山面において精査を行ったが遺構は確認されなかった。

今回確認された層位のうち、暗茶褐色混じり灰褐色粘土より上の各層については、いずれも北から南へ向かって傾斜を持って堆積しており、また各層が近似した土質を有していることなどから、霞堤を埋め立て、整地を行った際の整地土と捉えることができるものである。また整地土のうち黒灰色混じり暗黄色土や暗灰黄褐色粘質土など層位の上下に関係なく、近現代の遺物がみられることから、比較的短期間のうちに北側から埋め立てて整地を行っていったものと考えられる。

第4節 98—3区の調査

1. 位置 (PL. 3、第3図)

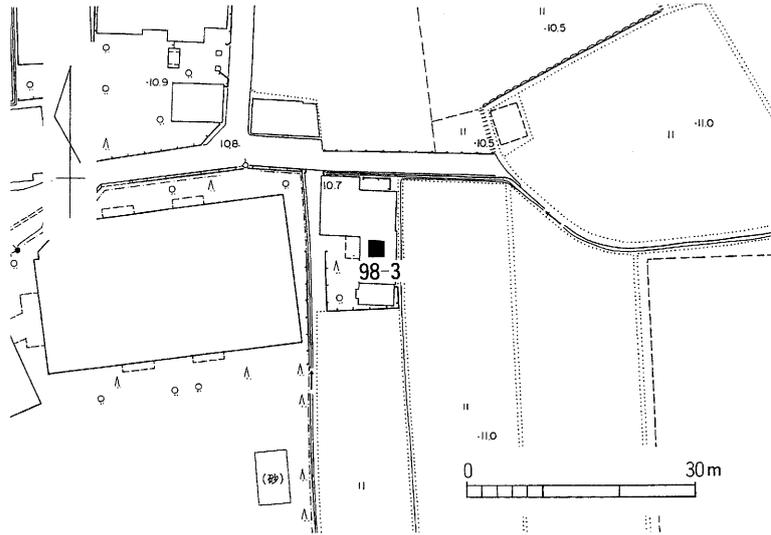
調査地は、遺跡の西端部、現在の男里集落の南東端部にあたる地点である。調査地の西には雄信小学校が隣接している。

地形分類的には男里川右岸に形成された自然堤防上に立地していると考えられる。トレンチは1カ所設定した。

2. 層位と遺物の出土状況 (PL. 4・7)

約20cm程の盛土を除去すると、現代の耕作土である灰色土(約10cm)と床土である灰白色混じり明橙

褐色土（約10cm）が現れる。続いて旧耕作土である灰白色混じり淡褐色土（約15cm）があり、ここからはわずかに土師器の細片が出土した。さらに旧耕作土に伴う床土である灰白色混じり暗橙褐色土（約20cm）が認められ、地山である暗褐色砂礫土へと至る。以上の各層はおおむね水平に堆積しており、地山面の標高は約10.4mを測る。このうち地山上面で遺構が確認された。



第3図 男里遺跡98—3区地形図

3. 遺構 (PL. 4・7)

確認された遺構は土坑 (SK01) が1基である。トレンチの南西隅部において確認され、更に外へ拡がるため全容は明らかでないが、平面は南北に長い楕円形を呈するものと考えられる。確認された規模は長軸約1.4m、短軸約60cm、深さは約20cmを測る。埋土は2層であり、暗灰褐色粘質土および暗灰褐色礫混じり砂質土である。遺物は出土しなかった。

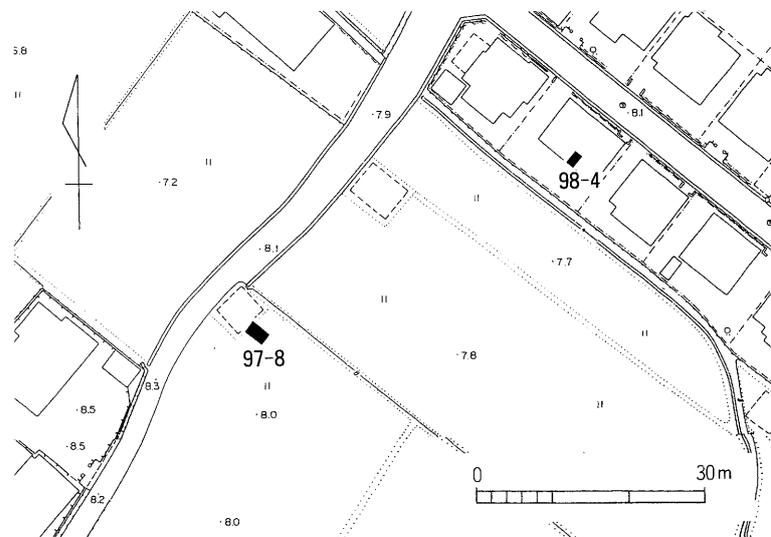
以上、部分的な確認であり、また遺物の出土もみられないために、その性格や時期については判然としないが、耕作に伴う段などである可能性も考えられるものである。

第5節 98—4区の調査

1. 位置 (PL. 3、第4図)

調査地は遺跡の北端部に位置し、府道樽井男里線「男里原田」交差点より南西へ約150m進んだ地点で、周辺は早くより宅地化が進んでいるところである。調査地から東方約150mには97—7区が位置する。

地形分類上は男里川旧河道または氾濫原に立地していると考えられ、既往の調査においても湧水の激しい砂礫層などが確認されている。トレンチは1カ所設定した。



第4図 男里遺跡98—4区、97—8区地形図

2. 層位と遺物の出土状況 (PL. 4・8)

淡褐色土から青緑色礫混じり土、暗青灰色砂礫土はすべて現代の盛土である。ただし調査地の地盤が

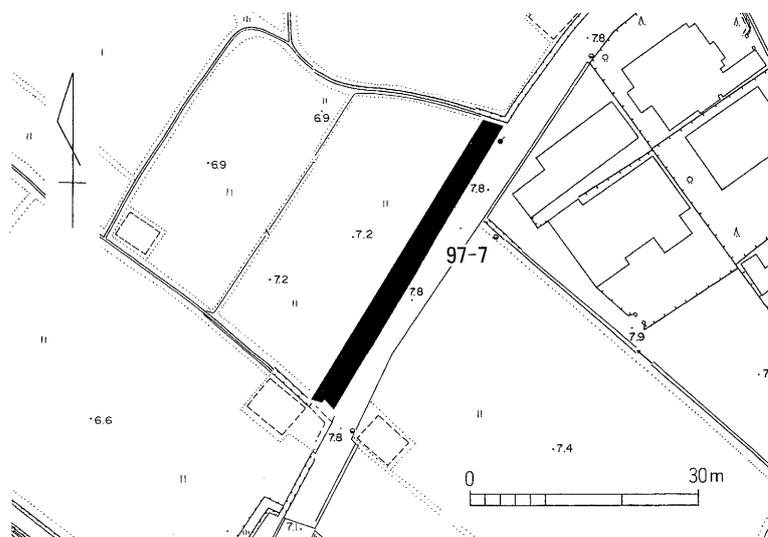
軟弱なため、数回にわたる盛土の施工が看取されるものであった。これら約1 mほどの盛土を除去すると旧耕作土である青灰色混じり淡黒灰色土（約20cm）が現れるが、この層の上部は盛土の際に攪拌されている。続いて黒灰色砂質土（約5 cm）、暗黄色混じり緑灰色シルト（約10cm）、淡黒灰褐色シルト（約10cm）の各層がおおむね水平に堆積している。このうち淡黒灰褐色シルトより土師器の細片が出土した。またこれら2層のシルト層は非常によく締まっており、耕地化の際に施された整地層であると捉えられる。シルト層直下の標高は約6.0mを測る。

続いてトレンチの西半部では黄褐色混じり暗灰褐色砂（約5 cm）、淡黄褐色砂（約10cm）が認められ、淡灰褐色混じり暗黄褐色砂へと至る。またトレンチの東半部ではシルト層直下に淡灰褐色混じり暗黄褐色砂が現れる。これらはいずれも軟弱な堆積を示すが、特に淡灰褐色混じり暗黄褐色砂からは湧水が著しい。またいずれの砂層からも遺物は出土しなかった。

第6節 97-7区の調査

1. 位置 (PL. 3、第5図)

調査区は男里遺跡の北端部に位置し、地形分類上では氾濫原に立地している。調査区東側では府道新設に伴う調査において、10世紀後半に属する複数の掘立柱建物が検出されている。また、北側200mに位置する戒畑遺跡ではこれらの建物とほぼ同時期に大規模な灌漑用水路が掘削されており、^⑬当地周辺の開発時期を窺い知る資料が近年の調査で数多く得られている。



第5図 男里遺跡97-7区地形図

2. 層位と遺物の出土状況 (PL. 5・9・10)

第1層・耕作土（約5 cm）の下には第2層・明黄褐色土（約20cm）、第3層・明褐色土（約10cm）、第4層・灰褐色土（約5 cm）と続く。第5層は地山の明褐色礫混じり土である。各層はおおむね水平に堆積しているが、調査区の北東部にのみ第4層の直下に淡黒褐色混じり褐色土が約10cm認められる。地山面の標高は約6.8～7 mを測り、トレンチの南西から北東方向に緩やかにレベルを下げている。第3・4層から土師器や須恵器などの細片が出土しているが図化できるものはなかった。

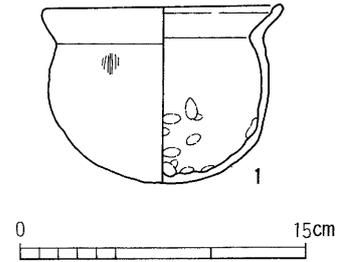
3. 遺構 (PL. 5・9・10)

検出した遺構は溝 (SD01)、土坑、ピットなどである。すべて地山面で検出した。SD01は調査区の南西部に位置し、北東一南西方向に伸びる。検出長約10m、深さ約15cmを測り、断面はU字状を呈する。埋土は黒褐色土で、繁に流水及び滞水した状況は認められなかった。埋土から土師器甕が出土している。

4. 遺物 (PL. 15、第6図)

SD01から土師器甕(1)が1点出土している。球形の体部からくの字状に外反し、口縁端部は僅かに肥厚する。口径12.2cm、器高9.5cmを測り、胎土は1mm程度の砂粒を少量含む。体部外面の一部にハケ目、口縁部及び体部内面にはナデが施される。全体に摩耗が著しい。また、口縁部内面には煤が付着する。

当遺物の年代は、他に共伴する遺物が無くまた、泉州地域での類例が少ないため正確には判断しかねるが、概ね8世紀後半が考えられる。



第6図 男里遺跡97-7区出土の土器

第7節 97-8区の調査

1. 位置 (PL. 3、第4図)

調査地は、遺跡の北端部に位置しており、府道樽井男里線「男里原田」交差点より南西へ約200mの地点である。調査地より東方約50mに98-4区が位置する。

地形分類上は旧河道または氾濫原上に立地しているものと考えられる。トレンチは1カ所設定した。

2. 層位と遺物の出土状況 (PL. 4・8)

現代の耕作土である灰黒色土(約15cm)と床土である暗橙色シルト(約5cm)、灰褐色混じり暗黄褐色土(約10cm)の下に、旧耕作土と捉えられる暗黄褐色混じり灰褐色土(約15cm)が認められ、さらに黄褐色混じり灰褐色シルト(約10cm)が一面に広がる。以上の各層はいずれも水平堆積をしている。続いてトレンチの東半部では灰褐色混じり暗黄褐色粘土(約10cm)が堆積しているが、トレンチ西半部では地山と捉えられる暗灰褐色砂礫が露呈する。またトレンチの南端部では灰褐色混じり暗黄褐色粘土の下にさらに灰褐色混じり淡褐色粘土(約5cm)があり、地山へと至る。地山面はおおむね平坦であるが、わずかにトレンチ南端部が窪んでいる。標高は約7.4mを測る。

以上、今回の調査においては遺構は確認されず、また遺物も出土しなかったが、確認された地山の状況より当調査区が氾濫原上に立地していることが確認された。

第8節 97-9区の調査

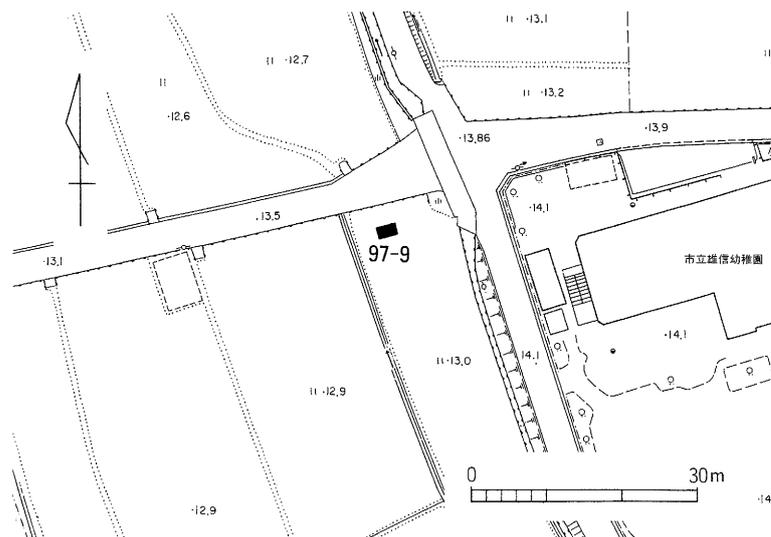
1. 位置 (PL. 3、第7図)

調査区は遺跡の南部に位置する。調査区の東側約200mの地点では府道の新設工事に伴う調査で、弥生時代中期の竪穴住居や木棺墓が多数確認されており、当該期における集落の中心地であったと考えられる。今回の調査では、集落の西方向への拡がり把握できる資料の獲得が期待された。トレンチは1カ所設定した。

2. 層位と遺物の出土状況 (PL. 4・8)

層位は第1層の耕作土(層厚約30cm)の下に部分的に第2層の灰色土が5cm程度介在し、第3層の

褐色混じり淡黄色土（層厚約20cm）、第4層の褐色砂礫と続く。第4層の上面で遺構精査をおこなったが、遺構は検出されなかった。さらに40cmほど当層を掘り下げたところ、湧水が若干認められるのみで、調査区周辺が氾濫原に位置していることが推測された。遺物は出土しなかった。



第7図 男里遺跡97-9区地形図

- 註 ① 藤岡謙二郎「泉南郡雄偉達村弥生遺跡」『大阪府史蹟名勝天然記念物調査報告書』第12輯（1932）
- ② 1996年度、大阪府教育委員会によって実施された双子下池調査時における採集遺物。本例は未報告ながら担当者の有井宏子氏の御厚意によって記載させて頂いた。記して御礼申し上げます。
- ③ 泉南市教育委員会「男里遺跡・II」『泉南市文化財年報No.1』（1995）
- ④ 泉南市教育委員会「男里遺跡95-1、96-6、96-7区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XIII』（1996）
- ⑤ 1993年度、財団法人大阪府埋蔵文化財協会、1995～96年度、財団法人大阪府文化財調査研究センターの調査による。
- ⑥ 1983年度、大阪府教育委員会の調査による。
泉南市史編纂委員会「第二章 古代の泉南」『泉南市史一通史編一』（1986）
- ⑦ 財団法人大阪府埋蔵文化財協会『滑瀬遺跡』（1987）
財団法人大阪府埋蔵文化財協会『滑瀬遺跡II』（1989）
- ⑧ 大阪府教育委員会『男里遺跡発掘調査概要・I』（1997）
大阪府教育委員会『男里遺跡発掘調査概要・II』（1997）
大阪府教育委員会『男里遺跡発掘調査概要・III』（1998）
- ⑨ 泉南市教育委員会「男里遺跡96-4区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XIV』（1997）
泉南市教育委員会「男里遺跡97-1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XV』（1998）
- ⑩ 泉南市教育委員会「男里遺跡92-1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書X』（1993）
- ⑪ 泉南市史編纂委員会「第二章 古代の泉南」『泉南市史一通史編一』（1986）
- ⑫ 泉南市教育委員会『男里遺跡発掘調査報告書』（1978）
- ⑬ 大阪府教育委員会『男里遺跡発掘調査概要・II』（1997）
- ⑭ 泉南市教育委員会「男里遺跡96-1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XIV』（1997）
- ⑮ 財団法人大阪府埋蔵文化財協会『男里遺跡』（1993）
- ⑯ 泉南市教育委員会『戎畑遺跡発掘調査現地説明会資料』（1996）
城野博文「泉南市戎畑遺跡の調査」『大阪府埋蔵文化財研究会（第35回）資料』財団法人大阪府文化財調査研究センター（1997）
泉南市教育委員会「戎畑遺跡98-1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XV』（1998）
- ⑰ 泉南市教育委員会「男里遺跡97-2区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XV』（1998）
- ⑱ 泉南市教育委員会「幡代遺跡」『泉南市文化財年報No.1』（1995）
泉南市教育委員会「幡代遺跡94-6区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XIII』（1996）
- ⑲ ⑱と同じ。
- ⑳ ⑤、⑥と同じ。

第3章 光平寺跡の調査

第1節 既往の調査 (PL. 1～3)

光平寺跡は男里川の支流である金熊寺川と菟砥川が合流する地点の右岸に位置する。地形分類上はこれらの河川によって形成された自然堤防上に立地している。

現在の光平寺境内には、大阪府の重要有形文化財に指定されている正平24 (1369) 年銘を持つ石製五輪塔が所在している^①。

当遺跡は範囲が長径約250m、短径約200mと絶対的な面積が小さいが、遺跡が含まれている男里集落の周辺は、開発が活発であることから、当遺跡も小規模ではあるが、1、2年おきに調査が行われてきた。

1977年に大阪府教育委員会が行った調査では、平安後期を中心とする瓦溜まりが検出され、仏像紋軒丸瓦などが含まれていた^②。以降の調査は、市教委によって行われ、火災に伴う整地層や中世の瓦や焼土塊を多量に含む土坑など、わずかずつではあるがデータの蓄積が進んでいる^③。

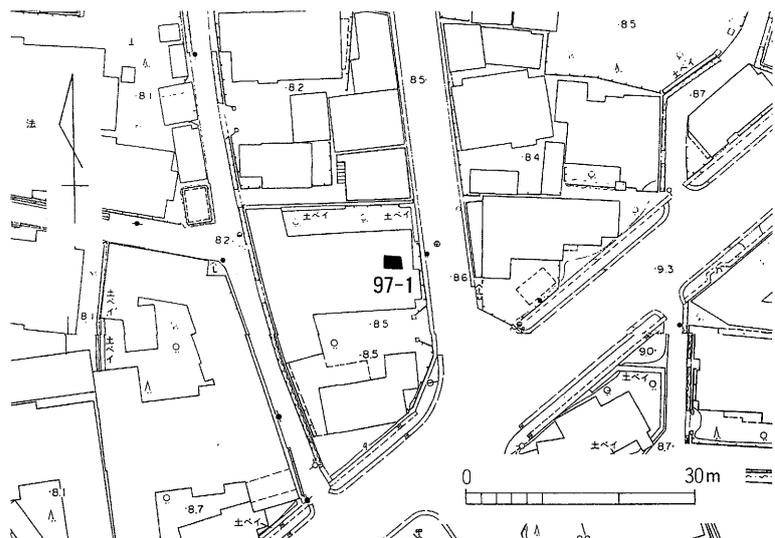
市域では、中世には寺院建立が盛んになるが、光平寺はその端緒とも捉えられるものである。周辺における調査の更なる進展を期待しなければならないが、その動向を見つめながら、中世の男里集落の展開や光平寺建立の意義をより深く研究していかなければならないであろう。

第2節 97-1区の調査

1. 位置 (PL. 3、第8図)

調査地は、遺跡の北東隅部に位置し、府道堺阪南線「男里」交差点より北へ約15mの地点である。現在の男里集落の南東部にあたり、調査地から南東へ約120mで現在の光平寺境内に至る。

地形分類上は自然堤防上に立地しているものと考えられる。トレンチは1カ所設定した。



第8図 光平寺跡97-1区地形図

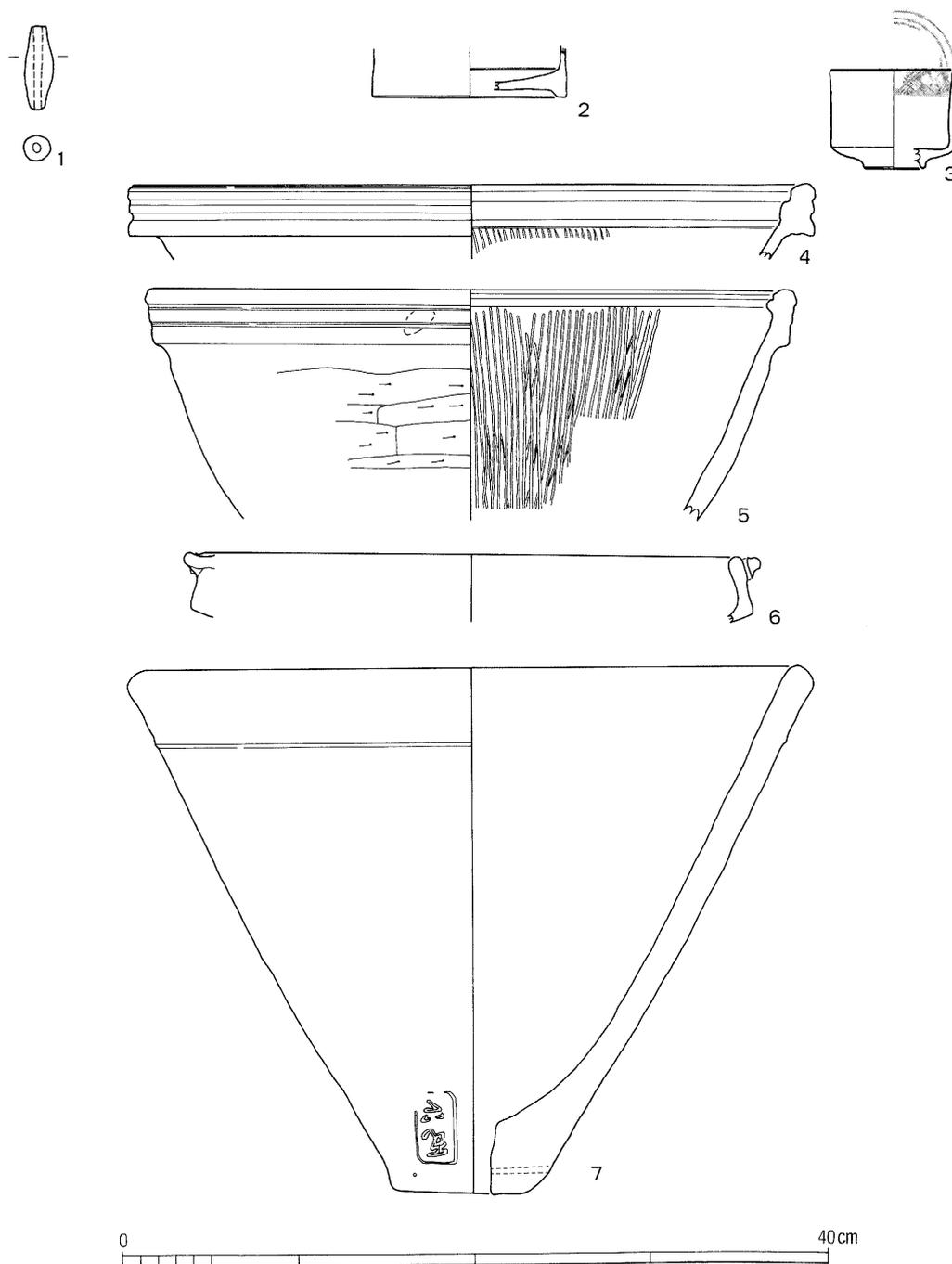
2. 層位と遺物の出土状況

(PL. 4・11)

厚さ約1mにおよぶ盛土および整地土を除去すると、一部整地土によって攪乱されているものの、旧耕作土と捉えられる暗灰茶褐色土 (約30cm) が拡がり、さらに灰褐色混じり淡茶褐色土 (約20cm) が認められる。またトレンチ中央から南端にかけてはこの層の上面を削りとり、淡灰黄褐色シルト (約20cm)、灰黄褐色土 (約15cm)、淡黄褐色粘質土 (約10cm) が堆積している。このうち淡黄褐色粘質土は非常によ

く縮まるものである。またトレンチ中央部においては、以上の3層を切り込んで淡灰褐色シルトが入っている。灰褐色混じり淡茶褐色土に続いては、暗褐色粘土（約60cm）が南東方向に緩やかに傾斜しながら広がっている。さらにトレンチの北半部を掘り下げたところ淡黄灰褐色粘土（約60cm）が西から東に向かって傾斜しながら堆積しており、続いて地山である淡黄褐色砂礫に至る。地山面の標高は約6.7mから6.2mを測り、西から東へ傾斜している。

これらのうち暗褐色粘土層では、平面的には検出されなかったものの、断面にピット状に掘り込まれた部分が認められ、調査区周辺において確認されている中世ベース層に相当すると考えることができる。



第9図 光平寺跡97-1区出土の遺物

ちなみに上面の標高は約7.0mから7.2mを測る。また断面において確認されたピット状遺構の規模は直径約20cmから30cm、深さ約20cmを測る。埋土は暗褐色混じり灰黄褐色粘質土や黄褐色混じり淡茶褐色粘質土である。また中世遺構面直上層である灰褐色混じり淡茶褐色土からは、瓦器や土師器がわずかに出土したが、細片のため図化し得なかった。

灰褐色混じり淡茶褐色土より上位の各層については耕地化に伴う盛土や、整地土などと捉えることのできるものである。これらの層から近世から近代にかけての遺物が出土した。

3. 遺物 (PL.15、第9図)

1～7はすべて旧耕作土から整地土にかけて出土したものである。磁器(2、3)、陶器(4、5)のほか、土師質土器(6、7)、土錘(1)がある。

1は小型の管状土錘である。土師質の製品で、長さ4.8cm、最大幅1.6cm、重量は9.85gを測る。

2は火入である。底部より上を欠くが、体部全体に暗乳白色の釉がかかり、また貫入が一面に広がる。

3は染付けの筒茶碗である。口縁部内面に四方襷紋が描かれる。

4、5はすり鉢である。4は口縁部を下方に拡張し、外面に2条、内面には1条の凹線がめぐり、わずかに残る体部外面にはケズリを施す。復元口径は37.6cmを測る。暗赤褐色の製品である。5は帯状を呈する口縁部の外面に2条、内面には1条の幅の狭い凹線がめぐり、また口縁端部をつまみだし、片口をなす。体部外面にはケズリが施され、内面には8条1単位のすり目が認められる。復元口径は36.1cmを測る、にぶい赤褐色を呈する製品である。

6は土師質の炮烙である。底部より内傾しながら直線的に立ち上がる口縁をもつが、口縁端部は面を成さない。また口縁端部には把手を貼りつけ、径3mmの孔が穿たれている。内外面ともにナデが施される。胎土には白色、灰色砂粒のほか、金雲母を多く含む。復元口径は30.2cmを測り、橙色を呈する製品である。7は土師質土器である。分厚い底部から上外方に直線的にのびる体部を持ち、口縁端部は丸くおさめる。内外面共に横方向のナデが施され、また底部にはハナレズナが認められる。底部中央には、直径3cmの孔が垂直に穿たれているほか、底部外面からも中軸に直交する方向に径1～3mmの孔が穿たれ、貫通している。底部外面には「瓦□」と読める刻印が、逆さまに押されている。復元口径36.7cm、器高30.2cm、底径8.5cmを測る。内外面ともに黄橙色を呈する製品である。この土器は、近年男里遺跡^④や幡代遺跡^⑤の他、泉州南部地域での確認例^⑥が増加しているもので、製糖の際に用いられた「瓦漏」と考えられるものである。時期的には18世紀後半～19世紀前半を考えておきたい。

註 ① 泉南市史編纂委員会「第二章 古代の泉南」『泉南市史—通史編—』(1987)

② ①に同じ。

③ 泉南市教育委員会「光平寺跡94—1・93—2区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書 XII』(1995)

④ 泉南市教育委員会「男里遺跡97—2区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書 XV』(1998)

⑤ 泉南市教育委員会「幡代遺跡」『泉南市文化財年報No.1』(1995)

泉南市教育委員会「幡代遺跡94—6区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書 XIII』(1996)

⑥ 泉佐野市教育委員会「岡本廃寺址の調査」『泉佐野市埋蔵文化財発掘調査概要VI』(1986)

泉佐野市教育委員会『宮ノ前遺跡』(1998)

財団法人大阪府埋蔵文化財協会『貝掛遺跡』(1988)

第4章 長山遺跡の調査

第1節 既往の調査（PL. 1・2、第10図）

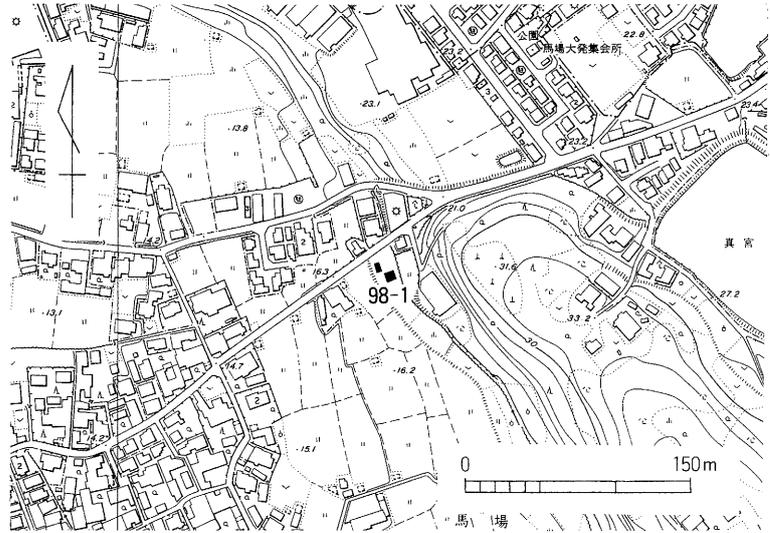
市域では基盤山地である和泉山脈から派生して、平野部へと伸びるいくつかの丘陵があるが、そのなかの一つである「長山丘陵」の先端西側斜面に長山遺跡は存在する。遺跡の範囲は東西約120m、南北約650mを測り、地形分類上は洪積段丘低位面及び丘陵、また沖積段丘面上にあたる。

当遺跡を含む馬場集落は近年宅地化が進んでいるが、遺跡の絶対的な規模が小さいことや耕作地として利用されている部分が多いため、調査

は今回を含めて4例しかなく、^①実態をつかみきれない部分が多い。現在までの知り得たことをまとめると、主だった遺構としては、地山面で落ち込みや溝、土坑、ピットなどが検出されている。^②また遺物は中世以降のものが主に出土している。これらのことから周辺は中世以降、耕作地として連綿と利用されてきたと考えられる。

隣接する男里遺跡においては、当遺跡の東側に近接する馬場集落内の調査において中世の包含層や掘立柱建物を構成するピットなどが検出されており、^③当遺跡との密接な関係を示唆しているといえよう。

以上、現在のところ当遺跡の活動の中心は中世と位置づけ、旧男里川流域における集落の活動の東限であると考えるのが妥当であろう。



第10図 長山遺跡調査区位置図

第2節 98—1区の調査

1. 位置（第10・11図）

調査地は、遺跡の中央やや北寄りに位置し、いわゆる長山丘陵の北西麓、現在の馬場集落の東端にあたる。現在までに西側に近接する地点において、数次の発掘調査が実施されており、それらによると周辺は中世に属する耕作域であったことが確認されている。^④

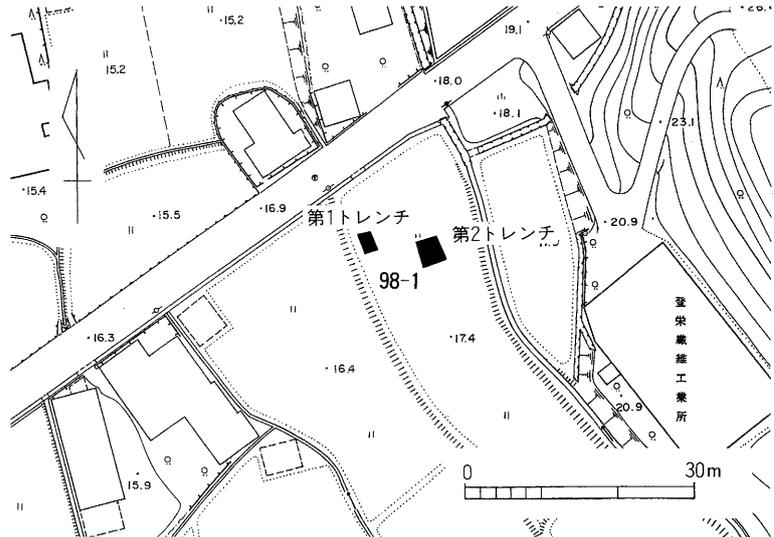
地形分類上は、沖積段丘面上に立地しているものと考えられている。トレンチは2カ所設定し、西側より第1トレンチ、第2トレンチと呼称する。

2. 層位と遺物の出土状況（PL. 6・11）

第1トレンチでは、トレンチ全体に大きな遺構が及んでいることが確認され、層位についてもほとん

どが遺構の埋土となっている。

まず厚さ約30cmの盛土を除去すると、トレンチ北端から中央部にかけては整地土である暗白色砂(約40cm)や淡灰褐色混じり明黄褐色粘質土(約35cm)、また旧耕作土と捉えられる淡灰白色混じり暗灰褐色土(約20cm)が認められる。続いて遺構(SD01)の埋土でもある暗褐色混じり灰褐色砂質土(約20cm)が堆積し、地山である灰褐色混じり淡黄褐色シルトに至る。地山面の標高は約16.4mを測る。またトレンチ北西端では暗褐色



第11図 長山遺跡98-1区地形図

混じり灰褐色砂質土と地山の間に旧耕作土である淡灰褐色砂質土がわずかに認められる。

トレンチの中央から南端部においては、先のSD01を切るSD02があり、以下地山に至るまで暗褐色混じり暗灰褐色土、暗黄褐色混じり暗灰褐色土、暗灰褐色粘質土などの埋土が確認された。

第2トレンチにおいては、約20cmの盛土を除去すると、直ちに地山である青灰色混じり橙褐色粘土が拡がっており、部分的に現代の耕作土である黒灰色土が認められるだけであった。確認された地山面の標高は約16.8mを測り、第2トレンチから第1トレンチにかけて、地山面は緩やかに傾斜していることが確認された。

3. 遺構 (PL. 6・11)

遺構は第1トレンチ地山上面において、溝2条、ピット2カ所が、それぞれ確認された。

SD01はトレンチ東半部において確認された溝で、南東から北西方向に直線的に伸びるものである。東肩部がトレンチ外に拡がっており、全形は不明であるが、検出長約2.5m、最大幅約1m、深さ10~20cmを測る。断面形状は口の開いた椀形を呈する。底部に比高差はほとんど認められないが、わずかに北端部の方が低い。埋土はトレンチ南端部では淡灰褐色砂質土、淡黄褐色混じり淡灰褐色土、暗褐色混じり灰褐色砂質土の3層であり、北端部においては上層の2層が削平され、暗褐色混じり灰褐色砂質土のみとなる。遺物は出土しなかった。

SD02はトレンチ南端より中央部にかけて確認された溝で、確認された形状は南東から北西方向へ直線的に伸びるものである。ただし断面観察によると、トレンチ南端部においてSD01の西肩を切っていることから、本来はさらに東側に軸を振った溝であると考えられる。SD01と同様、西肩部がトレンチ外へ拡がっており、また南端部はPit01、02によって切られているため、全形は不明であるが、検出長約1.4m、最大幅約50cm、深さ約60cmを測る。断面形状はいわゆるV字溝に近く、しっかりと掘り込まれている。底部は北から南へ向かって緩やかに傾斜している。埋土は4層で、上層から暗褐色混じり暗灰褐色土、暗黄褐色混じり暗灰褐色土、暗灰褐色粘質土である。このうち上層の2層はトレンチ西半部では削平されている。遺物は土師器がわずかに出土したが、細片のため図化し得なかった。

Pit01と02はともにSD02の南端部において確認されたもので、どちらもSD02を切っている。西半部がトレンチ外へと拡がっており、全形は不明であるが、平面はいびつな円形を呈し、直径約20～40cm、深さ約30cmを測る。埋土は共に1層であり、Pit01は淡黄褐色混じり暗灰褐色砂質土、Pit02は灰橙色混じり暗灰褐色砂質土である。遺物は出土しなかった。

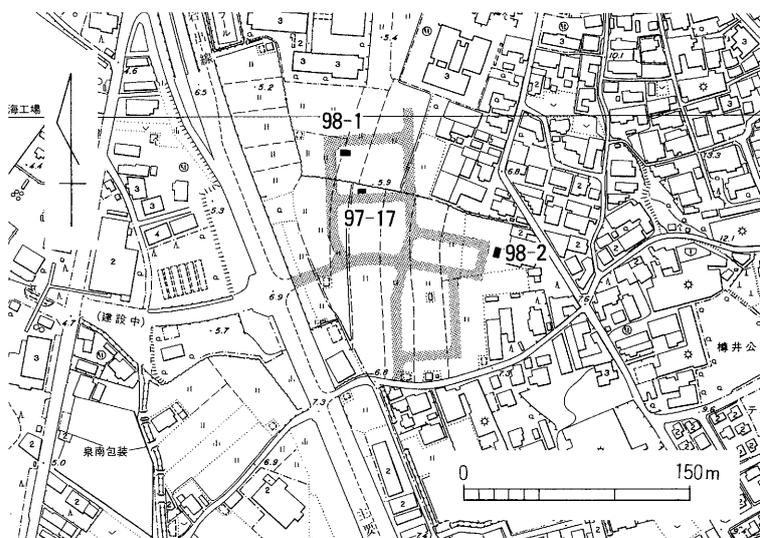
これら確認された遺構は、いずれも埋土の状況などから耕作に伴うものと捉えることができるもので、SD01と02についてはほぼ重複して設けられた耕作地の段などである可能性も考えられる。遺物が出土しなかったため、時期的には判然としないが、周辺の調査結果より中世に属するものと考えても差し支えないだろう。

- 註 ① 泉南市教育委員会「長山遺跡94-1区、94-2区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XII』（1995）
泉南市教育委員会「長山遺跡96-1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XV』（1998）
② 泉南市教育委員会「長山遺跡94-1区、94-2区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XII』（1995）
③ 泉南市教育委員会「男里遺跡89-1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書VII』（1990）
④ ②と同じ。

第5章 戎畑遺跡の調査

第1節 既往の調査（PL.1・2、第12図）

戎畑遺跡は市域の西端を流れる男里川の右岸に位置している。平成元年度に実施された分布調査によって、中世を中心とする遺物散布地として周知されることとなった。その規模は東西に約220m、南北に約220mを測る。また昨年度の調査において遺跡の範囲はさらに西側に拡大されている。地形分類上は沖積段丘面や氾濫原および谷底低地上に立地している。



第12図 戎畑遺跡調査区位置図

当遺跡は、大半が耕作地であったこともあり、分布調査以降わずかに

府道樽井男里線の建設に伴う試掘調査^①において、焼土坑や蛸壺を伴う廃棄土坑が確認されたのみで、その内容は不明な点が多かった。しかし、平成6年度には遺跡の南半部において2haにも及ぶ大規模な土地区画整備事業が持ち上がり、その対象地において平成7～8年度にかけて道路敷部分を中心とした発掘調査を実施した。また昨年度よりは、上記整理地における個人住宅建設に伴う調査などを継続的に行い、急速に遺跡の内容が明らかにされつつある。

当遺跡に最初に開発の手が入ったのは、平安時代半ばと指摘されている。遺跡の西部において南南西から北北西方向に一直線に伸びる大溝が確認され、大規模な灌漑用水路であると考えられている^②。またこの大溝から南西に約150mの地点では、大溝の支流と考えられる溝が検出されていることから^③、広範囲にわたる大規模な開発が行われたと捉えることができる。また先の調査では大溝に伴う集落は確認されていないが、南へ約150m、またさらに南へ40m離れた男里遺跡内の調査においては10世紀後半に属する掘立柱建物群が確認されており^④、今後、これらと大溝との関係が明らかになることが期待される。

12世紀以降、遺跡の様子は一変し、遺跡の南半部を中心として継続的に集落が営まれていることが明らかとなった。掘立柱建物を中心に構成されるこの集落では、その建物規模の違いや、同時に確認された土坑墓群の出土品の違いから、集落内での身分格差を示すものとして注目される。その他、埋葬に関する遺構として、泉州地方では2例目となる特殊な構造を持つ火葬施設も確認されている^⑤。

その他、特筆されるものとして多数の焼成坑が挙げられよう。現在、20数基以上確認されており、そのほとんどが真蛸壺の焼成を行っていたと考えられるのである。また焼成坑の構造としては、いわゆる野焼き用が一般的であるが、中にはロストルを有する「窯」も2基確認されている。

このように戎畑遺跡は中世を中心とする集落遺跡であることは明らかである。今後は、このように急激に増加したデータに基き、より詳細な集落の構造を解明することが急務であろう。

第2節 98—1区の調査

1. 位置 (第12・13図)

調査地は遺跡の中央からやや北側、土地区画整理によって整備された東西方向の道路の南側に位置する。調査区北側では、掘立柱建物が検出されており^⑥、比較的遺構密度が高い地点といえる。トレンチは1カ所設定した。

2. 層位と遺物の出土状況 (PL. 6・12)

層位は第1層が土地造成による盛土(約1.3m)、第2層・灰褐色土(約10cm)と続き、第3層・黒褐色粘質土(約10cm)、第4層が暗褐色土の地山である。地山面の標高は約6.3mを測る。遺構は地山面で検出した。

3. 遺構 (PL. 6・12)

検出した遺構は、土坑、ピットである。土坑はトレンチの外に拡がるため、全形が確認できたのはピット(Pit01)のみである。

Pit01はトレンチの東部に位置する。直径約20cmの円形を呈し、深さ約5cmを測る。埋土は第3層の黒褐色粘質土である。埋土からの遺物は出土しなかった。



第13図 戎畑遺跡98—1・2区、97—17区地形図

第3節 98—2区の調査

1. 位置（第12・13図）

調査地は、平成7年度の発掘調査区（95—1区）の東端に接する。先の調査では、隣接する地点で真蛸壺の焼成坑などが確認されている^⑦。

地形分類上は男里川右岸に発達した沖積段丘面上に立地しているものと考えられる。トレンチは1カ所設定した。

2. 層位と遺物の出土状況（PL. 6・12）

厚さ約60cmにおよぶ盛土直下に、現代の耕作土である暗灰色土（約10cm）と旧耕作土と捉えられる淡褐色砂質土（約20cm）の2層が水平に堆積している。続いてトレンチ北半部では地山である淡黄褐色粘質土が広がるが、トレンチ中央から南端にかけては淡灰褐色土や淡灰褐色混じり暗黄褐色土が堆積している。これらの各層にはブロック状の地山土が多く混入しており、地山面を攪拌して形成されたものと考えられる。いずれも耕作に伴う所作である可能性が高い。遺物は出土しなかった。なお確認された地山面は若干の起伏はあるが、おおむね平坦であり、標高は約7.0mを測る。地山面において遺構が確認された。

3. 遺構（PL. 6・12）

杭穴や耕作に伴うピットなどが8基確認された。平面はいずれもいびつな円形または円形を呈するもので、直径10～30cm、検出面からの深さ10～20cmを測るものである。埋土は淡褐色混じり淡灰褐色土や淡灰褐色混じり暗褐色土であり、いずれもブロック状の地山土を多く含む。遺物は出土しなかった。

第4節 97—17区の調査

1. 位置（第12・13図）

今回の調査区は、遺跡のほぼ中心部にあたり、昨年度から継続的におこなわれている調査のひとつである。調査地の位置関係は、97—9区、97—10区から約15m北側に位置している^⑧。また、95—1区の調査において焼成坑を1基、当調査地の南側で検出している^⑨。トレンチは1カ所設定した。

2. 層位と遺物の出土状況（PL. 6・12）

約1mの盛土を除くと現代耕作土である灰褐色粘質土がわずかに確認され、その下層に旧耕作土である灰褐色シルト（約20cm）、床土である茶褐色粘質シルト（約10cm）がほぼ水平に堆積しており、さらに下層に黒褐色粘質シルト（約10cm）が確認され、地山である暗黄褐色粘質シルトに至る。地山の標高は約6.7mであった。いずれの地層からも遺物は出土していないが、黒褐色粘質シルトは周辺の地層から考え、中世の包含層と位置づけられる。

3. 遺構 (PL. 6・12)

地山面において、トレンチ外に拡がる長辺約25cm、深さ約10cmの土坑を1基と、直径約10～20cmのピットを5カ所検出した。いずれも埋土は黒褐色粘質シルトである。遺物は出土しなかった。これらの遺構はいずれも植物痕と考えられるものである。

- 註 ① 財団法人大阪府埋蔵文化財協会『男里遺跡』(1993)
② 泉南市教育委員会『戎畑遺跡発掘調査現地説明会資料』(1996)
城野博文「泉南市戎畑遺跡の調査」『大阪府下埋蔵文化財研究会(第35回)資料』財団法人大阪府文化財調査研究センター(1997)
③ 泉南市教育委員会「戎畑遺跡97-1、97-8区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書 XV』(1998)
④ 財団法人大阪府埋蔵文化財協会『男里遺跡』(1993)
泉南市教育委員会「男里遺跡95-2区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書 XIII』(1996)
⑤ 和泉丘陵内遺跡調査会『万町遺跡』(1991)
⑥ ②に同じ。
⑦ ②に同じ。
⑧ 泉南市教育委員会「戎畑遺跡97-9、97-10区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書 XV』(1998)
⑨ ②に同じ。

第6章 童子畑遺跡の調査

第1節 既往の調査 (PL.1、第14図)

童子畑遺跡は、かつて市域で大規模に実施された分布調査によって遺跡として周知された^①。

遺跡は、現在の童子畑集落から北西に約300mの地点にある「弁天山」と呼ばれる独立丘陵上に立地し、北側部分は、府道泉佐野岩出線に面している。

遺跡の現況は、ほとんどが雑木林である。標高約158m、比高差約60mの丘陵のほぼ全体が遺跡に含まれている。丘陵の北側裾部分は、府道泉佐野岩出線建設時に大きくカットされ、擁壁が施されているが、その他は、ほぼ旧地形のまま残されていると考えられる。

丘陵の頂上部分には、石殿が祀られており、天和3(1683)年銘の石灯籠、貞享3年(1686)年銘の手水鉢等も所在する。また、北方約200mの標高約137mの独立丘陵である「諏訪山」にも、諏訪神社と呼ばれるほぼ同様の石殿が祀られ、市域における近世から近代の山間部の村の生活を知るうえで貴重な資料となっている。



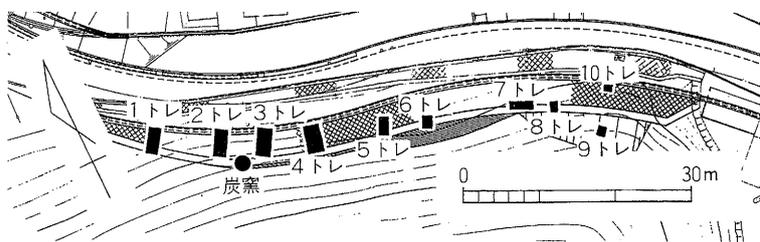
第14図 童子畑遺跡調査区位置図

第2節 98—1区の調査

1. 位置 (第14・15図)

調査地は、遺跡北方の府道泉佐野岩出線に面した部分である。

標高約103~106mを測る斜面部分であるが、部分的には平坦になっているところもあり、府道建設以前は里道として利用されていたものと考えられる。



第15図 童子畑遺跡98—1区地形図

地形的には、先述のとおり遺跡すべてが金熊寺側右岸の独立丘陵上に立地する。

2. 層位と遺物の出土状況 (PL.13)

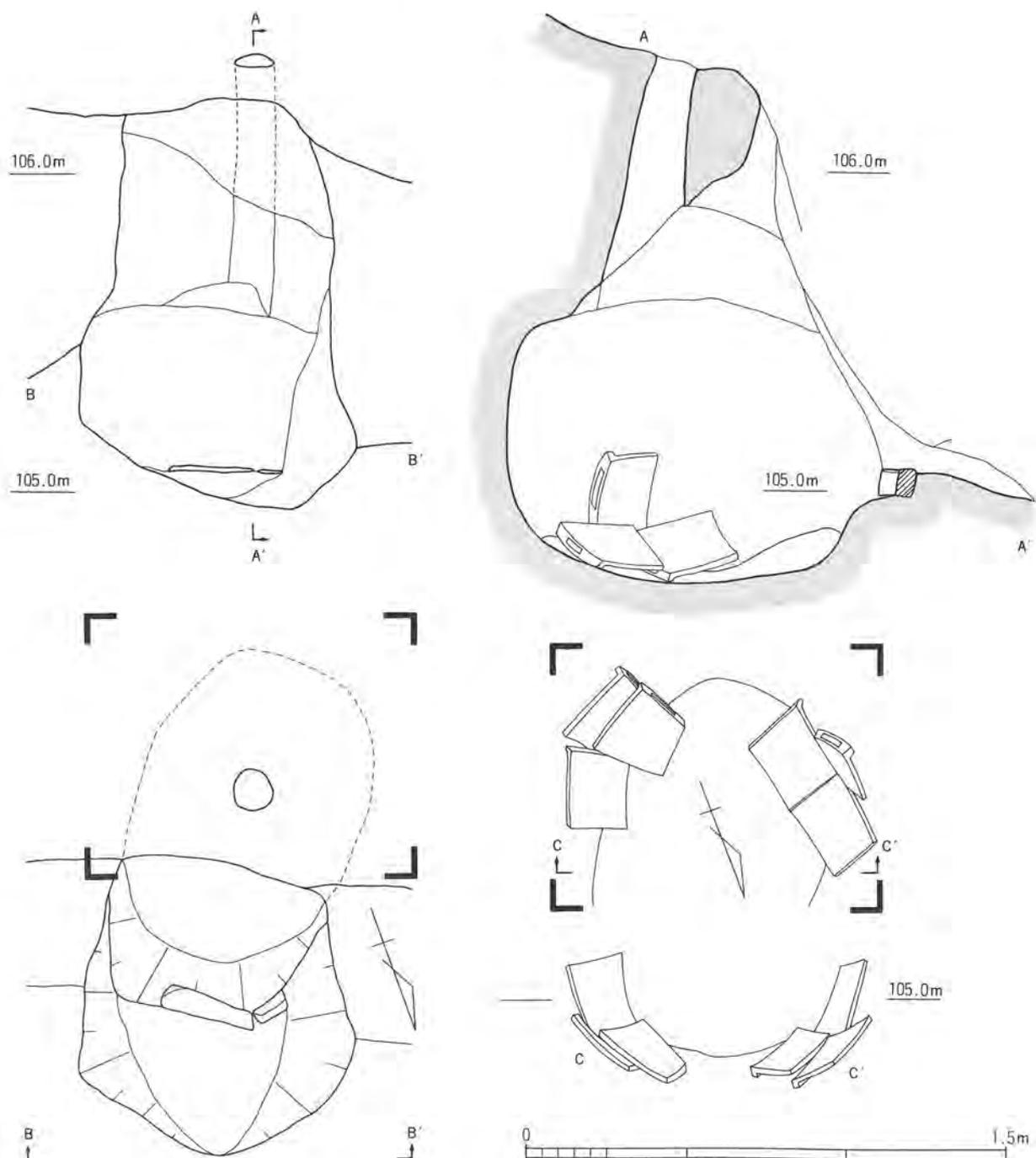
トレンチは10カ所設定した。いずれのトレンチも木の根で攪乱された表土を50~100cm除去すると淡

黄褐色または灰白色のシルトと礫が検出され、遺構・遺物は、まったく確認することはできなかった。

しかし、第2トレンチ上方約2mの地点の調査区との境界付近で、横方向に開口する土坑が認められたので、精査を行ったところ炭窯と考えられる遺構を1基確認し、この調査を行った。

3. 遺構 (PL.13、第16図)

炭窯と考えられるものを1基検出した。主軸は、 $N-40^{\circ}-E$ を示し、ほぼ北東に開口する。すべて地山をくりぬいて築造されている。検出後、開口していた部分は、全長1.0m、幅0.7mを測るが、上方



第16図 炭窯平面図及び立面図

は高さ0.6m、奥行き0.8mにわたって崩落している。

焚口と考えられる開口部の先端部分には、幅10cmほどの板状の石が、地山を掘り込んで据えられている。石はいずれも赤褐色に焼けている。また、石の外側の斜面をわずかに掘り込み、底辺0.4m、高さ0.4mの逆三角形を呈した平坦部分をつくっている。

内部は、幅0.8m、高さ0.9m、奥行1.2mを測り、床面はほぼ平坦で、奥壁方向に向かって楕円形を呈する。壁は、床との境界部だけが緩やかであるが、その後まっすぐに立ち上がっている。天井部は、崩落部分を除くと断面は緩やかな半円を呈する。燃烧部・焼成部は判別できないが、床面には炭が約10cmにわたって堆積しており、原形を留めた炭も多くあった。壁面は、全面にわたって赤褐色に焼け固く締まる。一方、炭層で隠れた部分の壁および床面は、全く焼けていなかった。

炭層を除去すると、壁の両側に3枚ずつの軒平瓦が検出された。床面から壁に向かって立ち上がる部分に2枚の瓦をいずれも瓦当面向奥壁に向けて並べ、その上に1枚の瓦を同じ方向に据えている。瓦の凹面には、窯の焼成時の炭化物が強固に付着していた。いずれの瓦も完全に壁には密着しておらず、地山との間にも炭層がわずかに認められた。

焚口側の床面には、灰褐色シルトが炭層の上面に約15cm堆積し、その上面には焚口に据えられていたものと同様の板状の石や瓦が内部へ倒れ込むような形で検出されている。いずれも焼けて、炭化物が付着している。

一方、窯のほぼ中心部では、煙出しと考えられる縦穴が検出された。地表から内部に向かってほぼ垂直方向に開けられる。検出長0.8m、地表部分で径12cm、内部で20cmの円形を呈し、内部の壁は非常に固く、還元されている。

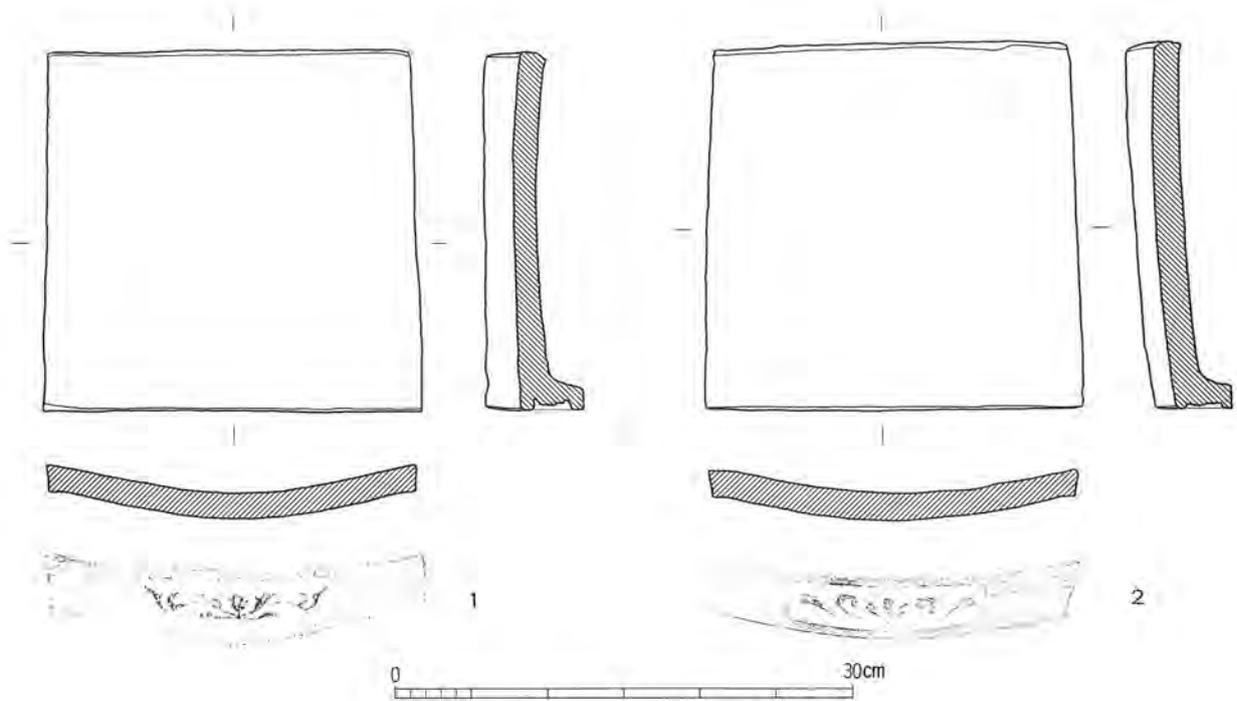
旧土地所有者からの聞き取りでは1930年代末頃まで、本調査において検出されたものかどうかは不明であるが、この付近で炭を焼いていたとのことで、この炭窯の年代の下限である。

4. 遺物 (PL.15、第17図)

出土した遺物は、すべて軒平瓦である。破片も含めて瓦当部の確認されたものは12点あった。文様は、2型式に分類できる^③。

1の型式は、全部で10点あった。文様は、退化した均整唐草文である。中心飾は丸みを帯びた花冠、萼で、端文様にはY字状若葉を配する。破断しているものを観察すると、顎部との接合部には、平瓦広端部凸面に斜め方向の粗い楕目を入れ、貼付けている。貼付けた顎部との境界には、端縁に平行方向に丁寧なユビナデが施される。すべての個体の法量を計測すると瓦当部で、上弦幅24.1～24.8cm、下弦幅23.8～25.1cm、厚さ3.9～4.3cm、弧深1.7～2.5cm、上外区幅0.7～1.0cm、下外区幅0.7～0.9cm、脇区幅5.4～6.6cm、段顎幅1.3～1.8cm、段顎深1.9～2.9cm、平瓦部は、狭端幅23.2～24.3cm、厚さ1.6～2.1cm、全長23.5～23.9cmを測る。瓦当全幅に対する文様区に占める割合は約54%である。

2の型式は、2点だけである。文様は、均整唐草文である。中心飾は3葉で、端文様には、芽状若葉を配するが、全体に連続しない文様であり、これは1の型式に対してさらに退化しているものと思われる。また、1と比較して文様の肉厚が貧弱で、やや粗いことが指摘できる。また、平瓦と顎部との接続部の調整もやや粗いユビナデが施される。各部の法量は、瓦当部で、上弦幅24.7cm、下弦幅23.8cm、



第17図 炭窯出土の軒平瓦

厚さ3.6cm、弧深1.8cm、上外区幅0.6cm、下外区幅0.5cm、脇区幅5.4cm、段顎幅1.6cm、段顎深2.1cm、平瓦部は、狭端幅23.2cm、厚さ1.4cm、全長23.9cmを測る。瓦当全幅に対する文様区の割合は約56%で、1に対してやや大きい。

これらの瓦の時期は、文様から判断して幕末から明治時代までのものであり、炭窯の時期の上限とすることができる。

註 ① 泉南市教育委員会「III 事業の概要」『泉南市文化財年報No1』(1995)

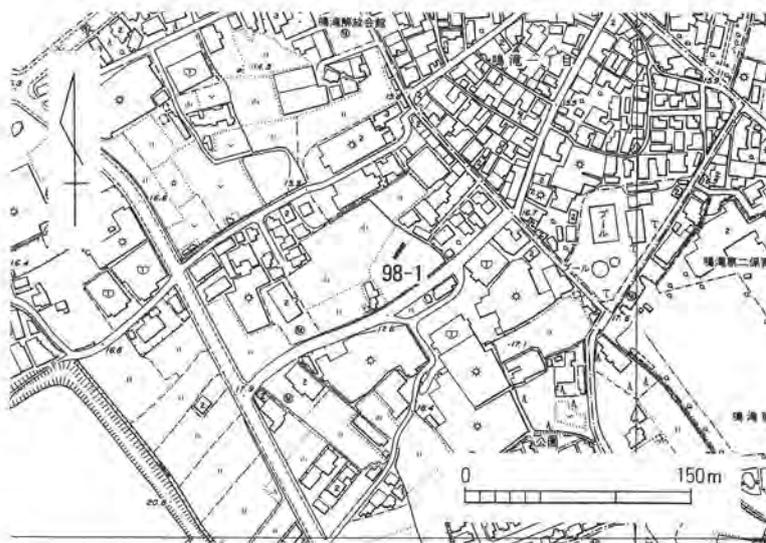
② 泉南市教育委員会『泉南市の石造物』(1990)

③ 分類および用語は、大手前女子大学史学研究所・大手前女子学園考古資料室『大坂城三の丸跡III』(1988)を参考にした。

第7章 本田池遺跡の調査

第1節 既往の調査（PL.1・2、第18図）

本田池遺跡は市域のほぼ中央部に位置し、現在の鳴滝集落の南西側にあたる。当遺跡は分布調査によって中世から近世にいたる遺物の散布地として周知されるようになった。その規模は東西約250m、南北約100m、地形的には、榎井川左岸から長山丘陵まで広がる段丘面、その中でも低位段丘面上に立地していると考えられる。また、遺跡名にもなっている本田池は、遺跡の南西に隣接する溜め池で、近世以降に水田開発に伴い、段丘部分の緩やかな谷状地形



第18図 本田池遺跡調査区位置図

を利用して構築されたと考えられている。また現在、池の南側約1/3が埋め立てられ、泉南市総合福祉センター『あいびあ泉南』が建設され、当市の福祉拠点として、活発に利用されている。

調査は大半が水田であったこともあり、発見からほとんど行われずにいたが、平成6年度に池の東側において、比較的大規模な調査が行われている^①。この調査では近世以降のものと考えられる鋤溝群と、本田池構築以前に谷地形に流れ込んでいたと考えられる溝が検出されている。この溝は長さ36m以上にもおよぶ大規模なもので、中世のものであると指摘されている。

以上のように本田池遺跡の調査はまだ始まったばかりであり、その内容についてもデータ不足の感が否めない。しかし市域では、洪積段丘上に立地する遺跡は希であることから、その内容究明に努めなければならない。遺跡周辺の各地区、すなわち樽井、鳴滝や信達市場、信達牧野といったところは比較的、開発が活発なところでもあり、今日まで継続的に試掘調査を実施している。あまり多くの遺跡の発見には至っていないが、このような地道なデータの蓄積が、やがては本田池遺跡の実態解明に大きく結びつくはずである。

第2節 98—1区の調査

1. 位置（第18・19図）

調査地は、遺跡の東端部、現在の鳴滝集落に接する休耕田である。先の94—1区からは北東方向へ、約200m離れた地点である。地形分類上は洪積段丘低位面に立地するものと考えられる。トレンチは1カ所設定した。

2. 層位と遺物の出土状況

(PL. 6・14)

約30cmの盛土を除去すると、現代の耕作土である灰色シルト（約25cm）とそれに伴う床土層である淡灰色混じり暗橙色粘質土（約5cm）、暗橙色混じり淡灰褐色土（約5cm）がそれぞれ水平に堆積している。続いて旧耕作土と捉えられる暗灰褐色混じり暗黄褐色土（約5cm）が認められ、基本的には直下に地山である淡褐色混じり暗黄褐色粘質土が広がる。地山面はおおむね平坦であり、

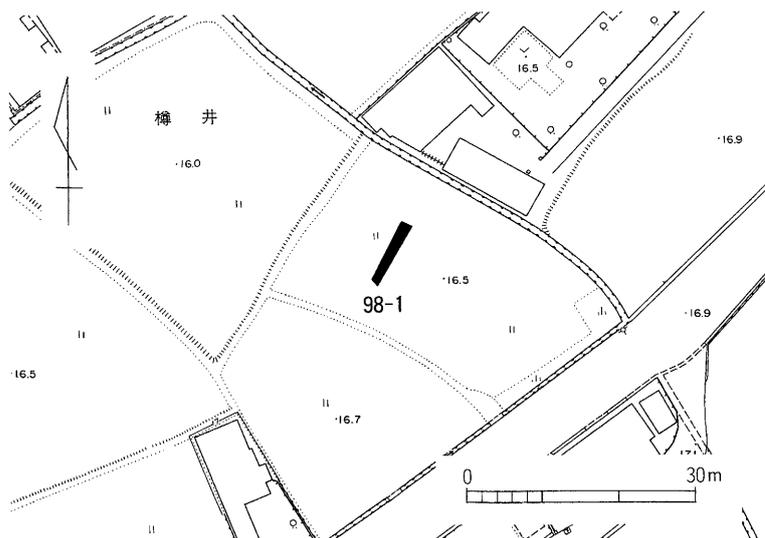
標高は約16.3mを測る。またトレンチの東端部では地山直上に淡灰褐色混じり暗黄褐色砂質土（約10cm）が堆積している。同じくトレンチ東端部では地山直下に褐色混じり灰白色粘土が確認された。

これらのうち地山面において遺構が確認された。またいずれの層からも遺物は出土しなかった。

3. 遺構 (PL. 6・14)

確認された遺構は、いわゆる鋤溝と考えられる小溝群である。全部で8条確認された。いずれも検出長約0.2～1.1m、幅約10～30cm、深さ約10～20cmを測るものである。埋土は1層であり、淡灰褐色シルトである。遺物は出土しなかった。

これらの鋤溝群は分布が非常に疎であり、また規模も小さいことなどから、明確なことは断言できないが、ほぼ現在の地割りと直交または平行する方向に伸びており、周辺が耕地開発される近世以降のものと思われるであろう。



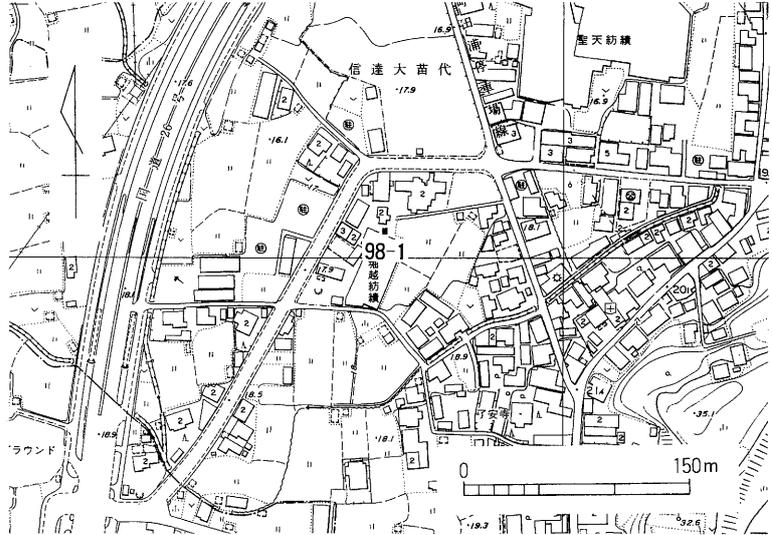
第19図 本田池遺跡98—1区地形図

註 ① 泉南市教育委員会「本田池遺跡94—1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書 XII』（1995）

第8章 大苗代遺跡の調査

第1節 既往の調査（PL.1・2、第20図）

大苗代遺跡は市域の東側に位置し、現在大苗代集落の北側にあたる。当遺跡は平成3年に行われた試掘調査によって周知されるようになった。この試掘調査から引き続き行われた本調査（91-1区）では、中世の溝が3条、その他に土坑やピットも多く検出されている^①。特に溝は谷地形に流れ込む灌漑水路または集落の排水施設であると指摘されている。遺物は古いものでは弥生時代の甕や奈良時代の須恵器などが包含層から出土しているが、その中心



第20図 大苗代遺跡調査区位置図

は平安時代後期からのものが多く、平安時代後期から中世にかけての集落遺跡であると判明した。

遺跡の規模は分布調査と周辺の地形から、東西約150m、南北約150mの範囲とされている。地形分類上は榎井川の左岸一帯に広がる広大な洪積段丘低位面にあたる。

この平成3年の調査以降、絶対的な調査件数が少ないため^②、遺跡の実態を明らかにするような遺構や遺物は検出されていない。しかし周辺に目を向けると北東には白鳳時代に建立された海会寺跡が所在し、すぐ南側には中世に建立された仏性寺跡、平安時代の大型の掘立柱建物が検出された北野遺跡が所在する。

また遺跡のすぐ南側には熊野街道がとおり、中世以降盛んになる熊野詣に関連した既戸王子跡なども所在することから、当遺跡周辺が古来から人々の往来が盛んであり、特に平安時代から中世にかけて大きく発展していたことは明らかであろう。

今後は当遺跡のみならず、近接する周辺の遺跡の調査に基づいた総合的な研究が必要である。

第2節 98-1区の調査

1. 位置（第20・21図）

調査地は遺跡の中央やや南側に位置している。調査区周辺は遺跡内でも集中的に調査が実施されており、調査区から北東約20mには先の91-1区が、また南東へ約30mには94-1区が位置し、それぞれ調査が実施されている。地形分類上は洪積段丘低位面に立地していると考えられる。トレンチは1カ所設定した。

2. 層序と遺物の出土状況

(PL. 6・14)

厚さ約30～60cmの盛土の下には、一部盛土によって攪乱されているが、現代の耕作土である黒灰色シルト（約20cm）が拡がっている。続いて淡青灰色混じり淡黄色シルト（約20cm）が部分的に堆積し、さらに淡黄色混じり淡青灰色シルト（約20cm）、淡青灰色シルト（約20cm）、明黄褐色粘質土（約10cm）が認められる。これらは調査区全域には認められず、整地土と捉えられるもので

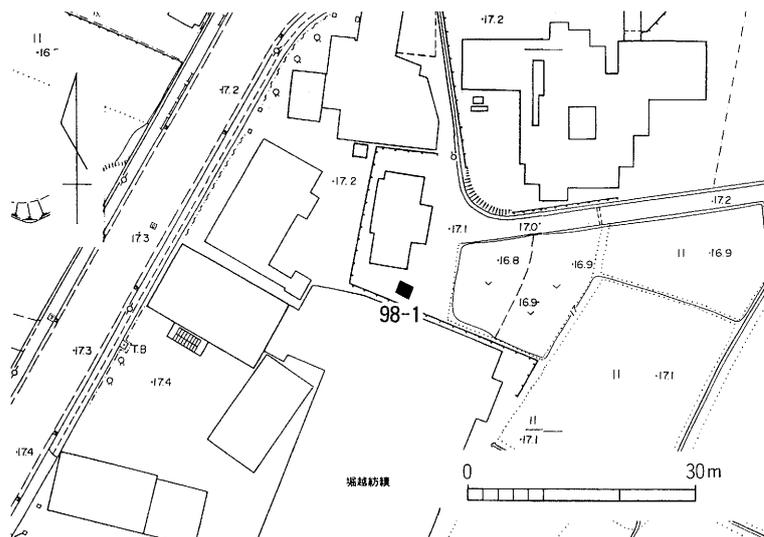
ある。これら整地土の下には旧耕作土と捉えられる明灰褐色粘質土（約10～20cm）が全体に拡がっているが、この層の上面は後世の削平によって、南から北に向かって緩やかに傾斜している。旧耕作土直下には地山である明橙褐色粘土が拡がるが、トレンチ東端においては淡黄灰褐色粘質土（約10cm）が地山直上に認められる。地山面はほぼ平坦であり、標高は約16.5mを測る。地山面において遺構が確認された。

また今回の調査では遺物はまったく出土しなかったが、明灰褐色粘質土層は既往の調査結果によって確認されている遺物包含層に相当するものと考えられる。

3. 遺構 (PL. 6・14)

トレンチの北端部においてピットが2カ所確認された。いずれも平面形状は円形を呈し、それぞれ直径約20cmを測る。深さは北側のPit01が約10cm、南側のPit02が約20cmを測る。断面形状はPit01が浅い椀形を呈するのに対し、Pit02はよりしっかりとした逆台形を呈する。埋土は共に1層で、Pit01は灰褐色粘質土であり、Pit02は炭やわずかな礫を含む淡灰褐色粘質土である。どちらも遺物は出土しなかった。

以上、今回確認されたピットは時期的には判然としないながらも、その規模や形態から中世に位置づけられるものであり、北東に位置する91-1区において確認された中世集落が調査区にまで及んでいたものと考えられよう。



第21図 大苗代遺跡98-1区地形図

註 ① 泉南市教育委員会「大苗代遺跡・I」『泉南市文化財年報No.1』(1995)
② 泉南市教育委員会「大苗代遺跡・I・II」『泉南市文化財年報No.1』(1995)
泉南市教育委員会「大苗代遺跡94-1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書 XII』(1995)

第9章 岡田遺跡の調査

第1節 既往の調査 (PL.1・2、第22図)

岡田遺跡は市域の東端を流れる榎井川の左岸に位置し、その規模は東西約450m、南北約650mを測り、市域では男里遺跡に次ぐ2番目の規模を有する遺跡である。地形分類上では榎井川の左岸に広がる広大な洪積段丘低位面に立地している。しかし過去の調査では、様々な微地形が隠されていることも明らかにされつつある。遺跡の現況は大半が水田で、北東部の一部に現在の岡田集落が位置している。

当遺跡は分布調査によって周知されて以来、小規模ながらも調査が継続的に行われ、多くのデータが蓄積されてきている。以下に現在までの知見を述べる。

現在、最も古い遺物としては遺跡の北東部における調査で出土した縄紋または弥生時代の石鏃が1点出土している^①。また同時に古代の須恵器なども出土しており、比較的早くから当遺跡が展開していた可能性がある。

中世以降には得られるデータも増大し、当遺跡が中世を中心として開発されたことを示唆している。まず生産に関しては、現在耕作地として利用されている遺跡の西半部においては、旧耕作土がすなわち中世の遺物包含層となっており、同時に複数の耕作面が確認されることから、開発されてから連綿と続く土地利用の変遷を辿ることができるのである。また昨年度の調査では、近現代においては、農閑期に煉瓦用粘土を採掘し、再び埋め戻し耕作地としていた例が確認された^③。時代は降るが土地利用の実体を示す貴重なデータであるといえよう。



第22図 岡田遺跡・座頭池遺跡調査区

集落に関する明確な情報は余り多くは得られていないが、現在の集落内において掘立柱建物を構成すると考えられるピット^④や室町時代の井戸状遺構^⑤など、中世集落の一端を窺い知ることができる遺構が検出されている。また昨年度は、今まであまり調査されることのなかった遺跡の北端部において比較的大規模な調査が行われ、中世の溝やピットなどの遺構が確認されている^⑥。同時に広範囲に及ぶと考えられる遺物包含層も確認されており、周辺に中世集落の存在を示唆する成果が得られている。

今後は集落や生産域の確定はもとより、更にデータの蓄積が進めば、具体的な中世集落の規模や構造の復元、また周辺をも含めた耕地開発の実体を探って行かなければならないだろう。

第 2 節 97—8区の調査

1. 位置（第22・23図）

調査地は、遺跡の北西縁辺部に位置している。周辺は早くから宅地となっていたため、近隣での調査例は少ない。最も近接した例として、北方約100mに97—5区が位置する^⑦。

地形分類上は氾濫原上に立地しているものと考えられる。トレンチは1カ所設定した。

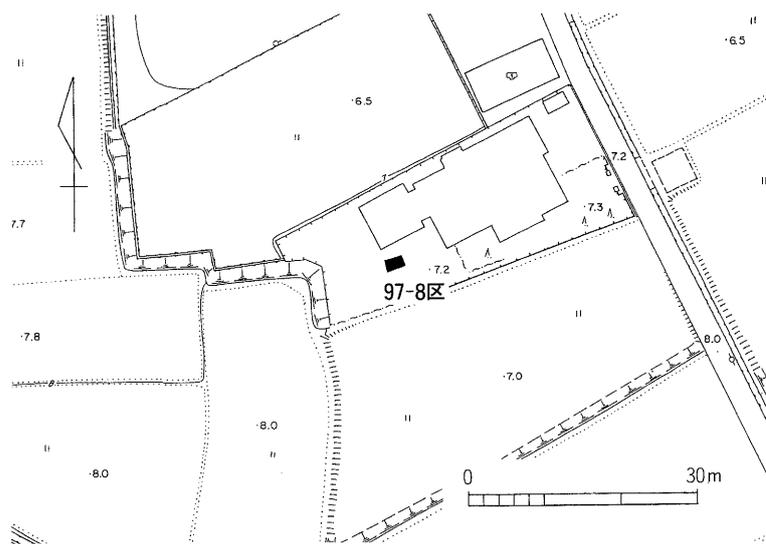
2. 層序と遺物の出土状況

(PL. 6・14)

約70cmに及ぶ盛土の下には、現代の耕作土である灰黒色土（約15cm）

とそれに伴う床土である灰褐色混じり淡黄褐色粘質土（約5cm）が水平に堆積している。続いて整地土と捉えられる灰白色粘土混じり淡灰褐色砂質土（約20cm）と青灰色シルト（約20cm）が認められる。さらにトレンチの北半部では旧耕作土である灰白褐色土（約5cm）及び淡褐色シルト（約5cm）が部分的に認められるが、基本的には青灰色砂礫混じりシルト（約20cm）が広がっている。この層の上面は非常に堅く締まっており、精査を行ったが、なんと遺構は確認されなかった。続いてトレンチ南半部においては以下に橙色ブロックを含む淡青灰色砂質土（約20cm）、淡青灰色粘土（約20cm）と続き、青灰色礫混じり土に至る。いずれも軟弱な層である。

以上今回の調査ではいずれの層からも遺構、遺物は確認されなかった。しかし確認された層序より調査地が97—5区と同様、氾濫原上に立地していることが明らかとなった。



第23図 岡田遺跡97—8区地形図

註 ① 泉南市教育委員会「岡田遺跡90—3区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書IX』（1992）
 ② 泉南市教育委員会「岡田遺跡の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XI』（1994）
 ③ 泉南市教育委員会「岡田遺跡97—2区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XV』（1998）
 ④ 泉南市教育委員会「岡田遺跡96—1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XIV』（1997）
 ⑤ 泉南市教育委員会「岡田遺跡94—1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XII』（1995）
 ⑥ 泉南市教育委員会「岡田遺跡97—1、97—2区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XV』（1998）
 ⑦ 泉南市教育委員会「岡田遺跡97—5区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XV』（1998）

第10章 まとめ

平成10年度の文化財保護法に基づいた埋蔵文化財包蔵地内における発掘届出および通知は、第1表に示したとおり平成10年1月1日から平成10年12月31日までで45件を数える。

この中で本書で報告する市内遺跡群の各地において個人住宅等に伴う発掘調査は、16件である。その内訳は、第2表に示したとおり、男里遺跡4件、長山遺跡1件、戎畑遺跡2件、童子畑遺跡1件、本田池遺跡1件、大苗代遺跡1件である。これらの調査面積は、比較的小規模なものが多いが、個々の調査で得られた情報はそれぞれ大きな意味を持つものであることは言うまでもない。

なお、本書では前年度未報告分の男里遺跡3件(97-7~9区)、光平寺跡1件(97-1区)、戎畑遺跡1件(97-17区)、岡田遺跡1件(97-8区)も併せて報告している。以下、今年度得られた結果と過去のデータ等とを比較しながら、まとめと総括を行ってみたい。

男里遺跡は市域最大の規模を誇り、例年最も調査件数の多い遺跡である。今年度も4件の調査を実施した。

98-1区は現在の男里集落南西部における調査であった。明確な遺構は確認されなかったものの、安定した地山を確認することができた。周辺の調査では礫層や砂層など、男里川の氾濫原に属する旧地形が多く確認されている地域でもあり、今回の調査結果はより詳細な微地形の復元を行う貴重なデータが得られたといえる。

98-2区は男里川から北東へ約30mの地点での調査であった。最近まで男里川二重堤防である「霞堤」の痕跡が認められた地点でもあり、現在も地形図に示される高まりとは南側に接している。調査では霞堤本体の追求こそされなかったが、霞堤整地の時期を近現代という枠の中で考えることのできるデータが得られた。また調査区より東へ約30mの地点での調査^①においても地山直上に近代の整地層が確認されていることから、今回確認された整地業についても同時期に行われた可能性が高い。

98-3区は現在の男里集落の南東端部、市立雄信小学校の北西に隣接する地点での調査であった。ここでは地山面において落ち込みが確認され、地割りの方向などは不明瞭ながら耕作に伴う段と考えられる。過去に調査区の北西約40m地点においても中世の鋤溝などが確認されていることから、周囲は広く耕地化されていたものと考えられる。しかし周辺の地山は決して安定しているとは言い難いものであり、今後はこのような不安定な地所の耕地開発の開始時期が明確になることが期待される。

98-4区は遺跡の北端部において、早くより宅地として開発された地域での調査であった。調査の結果、氾濫原と捉えられる旧地形が確認され、従来の調査成果を裏付ける結果が得られた。

97-7区は遺跡の北端部において、道路拡幅に先立って実施された。結果、調査区を横断するような形で8世紀後半の溝が確認された。調査区周辺において、当該期の遺構や遺物の確認例は余り多いとはいえない。わずかに約100m西方の地点で確認された柱掘方や落ち込みなどが知られるだけである^③。今回の調査結果によって、より具体的に遺跡の北縁部でも当該期の集落などが期待されるようになった。また調査区の東方では10世紀後半の集落が確認されていることから、今後、これらの集落相互の変遷が^④より明らかになることが期待される。また97-8区でみられるように、周辺には男里川旧河道や氾濫原が拡がることから、今後旧地形の復元がさらに進めば、自ずと古代の遺構、遺物の分布範囲も確定されるであろう。

97-9区は唯一、双子池南方での調査であった。従来より双子池南方では弥生時代中期の遺物が多く採集されており、古く昭和初期に遺跡発見の契機となったのも、周辺での弥生土器発見によるものである^⑤。現在までに十数棟の竪穴住居や掘立柱建物、木棺墓、自然流路など多くの遺構が確認され、集落の構造が把握されつつある。さて今年度の調査においては明確な遺構や遺物は確認されず、弥生集落は調査区までは及んでいないことが確認され、集落の範囲はさらに東方に限定される可能性が高くなった。

光平寺跡では、昨年度調査の97-1区について報告している。調査では明確な遺構こそ確認されなかったが、中世遺構面のベースとなる暗褐色粘土層が確認されたことは大きな成果であった。今後、中世男里集落とともに、光平寺の創建と展開とが明らかになることが期待される。

また今回出土した土師質瓦漏は、形態や法量、製作技法においては過去の出土例と比較しても大きな違いは窺えないが、しかし「瓦□」と読むことのできる刻印が認められたことは特筆される。従来の出土例でも、消費段階で記されたと考えられる文字資料は確認されているが^⑥、今回のように製作段階でのものは初めてであり、想像を逞しくすれば消費者から瓦屋への発注が行われていたという図式を想定することも可能になってくる。

近年の調査成果によって、瓦漏を用いた製糖は市内はもとより、泉佐野市や阪南市など泉州南部地域の比較的広い範囲において行われていたと考えられるに至っており^⑦、今回のように製作形態の追求が可能な資料が増加すれば、製糖業の実態についても肉迫することが可能となるであろう。

戎畑遺跡では今年度2件の発掘調査を実施し、昨年度未報告分の1件と合わせて3件の調査について報告している。いずれも平成7～8年度にかけて大規模な調査が実施され、土地区画整理が実施された地点に含まれている。従来からの予想に違わずすべての調査区において遺構が確認された。まず98-1区においてはピットが確認されたことで、先の調査で確認されている集落の範囲をさらに広げる成果が得られた。98-2区や97-17区においては、遺構はいずれも耕作に伴う杭穴や植物痕と捉えられるものであり、中世集落に直接結びつく成果は得られなかった。しかし98-2区では耕地開発の際に地山面までも攪拌されていることが確認されており、中世包含層である暗褐色粘土層を削平していると考えられるのである。今後の調査においても留意しなければならない点である。また97-17区では、隣接する先の調査においても顕著な遺構は確認されておらず、遺構分布密度の低いことが改めて実証された。

長山遺跡では1件の調査を実施した。現在までの調査例が限られており、またそれぞれの調査区が隣接するという状況の下、実施されたものである。調査では中世期の耕作に伴う溝やピットが確認され、従来の調査成果をさらに裏付ける結果が得られた。

童子畑遺跡は今年度初めて本格的な調査が実施された。丘陵斜面に平行する些少な範囲での調査ではあったが、それでも保存状態の良好な炭窯が確認されたことは最大の成果である。具体的な遺構として発見された今回の例は、従来の研究に新たな知見をもたらすのはもちろんのこと、今後市域の近代史を語るうえで欠かせない資料となるであろう。

本田池遺跡では1件の調査が実施された。現在までの調査例は少ないが、当遺跡は市域の平野部の大半を占める広大な洪積段丘上に立地する数少ない遺跡であり、特に調査の動向が注目されるのである。今年度は現在の樽井鳴滝集落に隣接する地点での調査であった。調査では耕作に伴う鋤溝が確認され、近世以降、本格的に耕地開発が進んだことを実証する成果が得られた。

大苗代遺跡では1件の調査が実施された。当遺跡も長山遺跡と同様調査例は多くなく、またそれぞれ

の調査地点が隣接するという状況の下に実施された。調査ではピットが確認され、過去に東隣において確認されている中世集落の範囲がさらに広がるという結果が得られた。周辺には熊野街道がとおり、街道と共に育まれた集落と想定されていることから、さらなる情報の増加が望まれる。

岡田遺跡では昨年度未報告の1件の調査について報告している。調査例の少ない遺跡の西縁部での調査である。結果、明確な遺構は確認されなかったが、周辺に多く想定されている微地形を復元するデータを獲得することができた。

以上、今年度の調査成果を述べてきた。いずれも小規模な範囲での調査であり、そのためその意義を十分に見い出せていないのではという不安が残る。今日のように本市における発掘調査を行政が主体となって実施するようになって、すでに20年近くが経ち、その間に得られた多くの情報は着実に蓄積されてきた。これらのうちの一部分については調査報告書等として刊行し、調査成果の公表に努めているが、我々に与えられた情報の多くは、十分に活用されていないのも事実である。

21世紀を目前に控え、多くの変革が予想される社会のなかで、文化財行政に求められる役割はさらに重きをなすであろう。埋もれた歴史の中に学ぶべき事柄は決して少なくない。

我々、調査担当者に与えられた使命は、それらの歴史情報を余すことなく社会に公開し、人々に活用を求めることなのではないだろうか。そのために我々は与えられた状況の下で、最大限の成果を挙げなければならないのである。そのことを再認識し、今年度の総括としたい。

- 註 ① 泉南市教育委員会「男里遺跡93-6区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査保報告書 XI』(1994)
② 泉南市教育委員会「男里遺跡89-10区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査保報告書 VII』(1980)
③ 泉南市教育委員会「男里遺跡・II」『泉南市文化財年報No.1』(1995)
④ 財団法人大阪府埋蔵文化財協会『男里遺跡』(1993)
泉南市教育委員会「男里遺跡95-2区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査保報告書 XII』(1996)
⑤ 藤岡謙二郎「泉南郡雄信達村弥生遺跡」『大阪府史蹟名勝天然記念物調査報告書』第12輯(1932)
⑥ 幡代遺跡出土例には体部に「十五ばん」と墨書された製品があり、製糖の実態を語る資料として注目される。
泉南市教育委員会「幡代遺跡」『泉南市文化財年報No.1』(1995)
⑦ 泉佐野市教育委員会「岡本廃寺址の調査」『泉佐野市埋蔵文化財発掘調査概要 VI』(1986)
泉佐野市教育委員会『宮ノ前遺跡』(1998)
財団法人大阪府埋蔵文化財協会『貝掛遺跡』(1988)

第5表 文化財覧表

1	正法寺跡	51	屯田遺跡	101	禪興寺跡	151	昭和池遺跡	201	向出遺跡
2	小垣内遺跡	52	八王子遺跡	102	ダイジョウウ寺跡	152	上村遺跡	202	高田西遺跡
3	大谷池遺跡	53	慈眼院金堂・多宝塔	103	上之郷遺跡	153	狐池遺跡	203	向山遺跡
4	大久保B遺跡	54	日根神社遺跡	104	向井代遺跡	154	上野中道遺跡	204	高田南遺跡
5	下高田遺跡	55	西ノ上遺跡	105	意賀美神社本殿	155	宮遺跡	205	和泉鳥取遺跡
6	紺屋遺跡	56	川原遺跡	106	向井池遺跡	156	宮南遺跡	206	兩山遺跡
7	口無池遺跡	57	母山遺跡	107	三軒屋遺跡	157	芋掘遺跡	207	山中溪遺跡
8	東門寺跡	58	母山近世墓地	108	川原遺跡	158	石ヶ原遺跡	208	内畑遺跡
9	降井家屋敷跡	59	向井山遺跡	109	岡田東遺跡	159	高倉山南遺跡	209	皿田池古墳
10	大久保C遺跡	60	鏡塚古墳	110	岡田遺跡	160	本田池遺跡	210	正方寺遺跡
11	中家住宅	61	梨谷遺跡	111	氏の松遺跡	161	上代石塚遺跡	211	西畑遺跡
12	大久保A遺跡	62	笹ノ山遺跡	112	座頭池遺跡	162	信之池遺跡	212	自然田遺跡
13	五門北古墳	63	土丸遺跡	113	岡田西遺跡	163	滑瀬遺跡	213	玉田山遺跡
14	五門遺跡	64	土丸南遺跡	114	新伝寺遺跡	164	六尾遺跡	214	玉田山古墳群
15	五門古墳	65	兩山城跡	115	中小路北遺跡	165	六尾南遺跡	215	玉田山須志器窯跡
16	大浦中世墓地	66	土丸城跡	116	中小路西遺跡	166	金熊寺遺跡	216	寺田山遺跡
17	大浦遺跡	67	下大木遺跡	117	中小路遺跡	167	童子畑北遺跡	217	黒田西遺跡
18	甲田家住宅	68	大木遺跡	118	坊主池遺跡	168	童子畑遺跡	218	鳥取北遺跡
19	久保B遺跡	69	稲倉池北方遺跡	119	中小路南遺跡	169	楠畑北遺跡	219	鳥取遺跡
20	鳥羽殿城跡	70	大西遺跡	120	北野遺跡	170	専徳寺遺跡	220	鳥取南遺跡
21	墓の谷遺跡	71	松原遺跡	121	一岡神社遺跡	171	天神ノ森遺跡	221	黒田南遺跡
22	来迎寺本堂	72	中開遺跡	122	海会寺跡	172	キレット遺跡	222	神光寺(蓮池)遺跡
23	池ノ谷遺跡	73	末廣遺跡	123	海会寺瓦窯	173	高田遺跡	223	三味谷遺跡
24	成合寺遺跡	74	安松遺跡	124	大苗代遺跡	174	男里北遺跡	224	三升五合山遺跡
25	山ノ下城跡	75	長滝遺跡	125	仏性寺跡	175	戎畑遺跡	225	小口谷遺跡
26	山出遺跡	76	植田池遺跡	126	海菅宮池遺跡	176	男里遺跡	226	井関遺跡
27	上瓦屋遺跡	77	郷ノ芝遺跡	127	市場遺跡	177	光平寺跡	227	石田山遺跡
28	湊遺跡	78	日根野遺跡	128	向井山遺跡	178	光平寺石造五輪塔	228	西鳥取遺跡
29	壇波羅密寺跡	79	机場遺跡	129	新家遺跡	179	樽井南遺跡	229	戎遺跡
30	壇波羅遺跡	80	棚原遺跡	130	下村遺跡	180	男里東遺跡	230	貝掛遺跡
31	佐野王子跡	81	羽倉崎東遺跡	131	下村北遺跡	181	長山遺跡	231	金剛寺遺跡
32	上町東遺跡	82	羽倉崎遺跡	132	下村1号墳	182	山ノ宮遺跡	232	塚谷古墳群
33	市場東遺跡	83	嘉祥神社本殿	133	新家オドリ山東遺跡	183	前田池遺跡	233	箱作今池遺跡
34	若宮遺跡	84	道ノ池遺跡	134	新家オドリ山遺跡	184	幡代遺跡	234	飯ノ峯畑遺跡
35	上町遺跡	85	羽倉崎上町遺跡	135	下村2号墳	185	幡代南遺跡	235	井山遺跡
36	俵屋遺跡	86	船岡山遺跡	136	新家古墳群	186	奥ノ池遺跡	236	箱作ミノバ石切場跡
37	北尻遺跡	87	岡本廃寺	137	新家オドリ山南遺跡	187	林昌寺跡	237	箱作南遺跡
38	岡口遺跡	88	田尻遺跡	138	フキアゲ山西遺跡	188	林昌寺瓦窯跡	238	茶屋遺跡
39	中嶋遺跡	89	船岡山南遺跡	139	引谷池窯跡	189	林昌寺銅鐸出土地	239	西鳥取遺跡
40	小塚遺跡	90	夫婦池遺跡	140	兔田遺跡	190	岡中遺跡	240	加茂神社本殿
41	十二谷遺跡	91	樫井西遺跡	141	フキアゲ山東遺跡	191	高田山古墳群	241	田山遺跡
42	丁田遺跡	92	藤波遺跡	142	フキアゲ山1号墳	192	岡中西遺跡	242	師道谷遺跡
43	新池尻遺跡	93	樫井城跡	143	フキアゲ山2号墳	193	兩山南遺跡	243	四郎太郎遺跡
44	大坪遺跡	94	奥家住宅	144	兔田古墳群	194	福島遺跡	244	桑畑石切場跡
45	市堂遺跡	95	道ノ池遺跡	145	池尻遺跡	195	尾崎海岸遺跡		
46	北ノ前遺跡	96	岡ノ崎遺跡	146	中の川遺跡	196	馬川北遺跡		
47	野々宮遺跡	97	中萮蒲遺跡	147	岩の前遺跡	197	馬川遺跡		
48	総福寺天満宮本殿	98	岸ノ下遺跡	148	別所北遺跡	198	下出北遺跡		
49	宮ノ前遺跡	99	諸目遺跡	149	別所遺跡	199	室堂遺跡		
50	垣外遺跡	100	城ノ塚古墳	150	高野遺跡	200	平野寺(長楽寺)跡		

SENNANSHI-ISEKIGUN-HAKKUTUTYŌSA-HOUKOKUSHYO XVI

SENNANSHI-BUNKA Z AI-TYŌSA-HOUKOKUSHYO VOL.32

A Report on Archaeological Research at Sennan City in 1998

C o n t e n t s

Preface

Chapter 1	Process of Research Work	1
2	Research of ONOSATO site	6
3	Research of The Ruin of KŌHEIJI Temple	11
4	Research of NAGAYAMA site	16
5	Research of EBISUBATA site	19
6	Research of WARAZUBATA site	23
7	Research of HONNDAIKE site	27
8	Research of ONOSHIRO site	29
9	Research of OKADA site	31
10	Conclusion	33

Abstract of Report

Plates

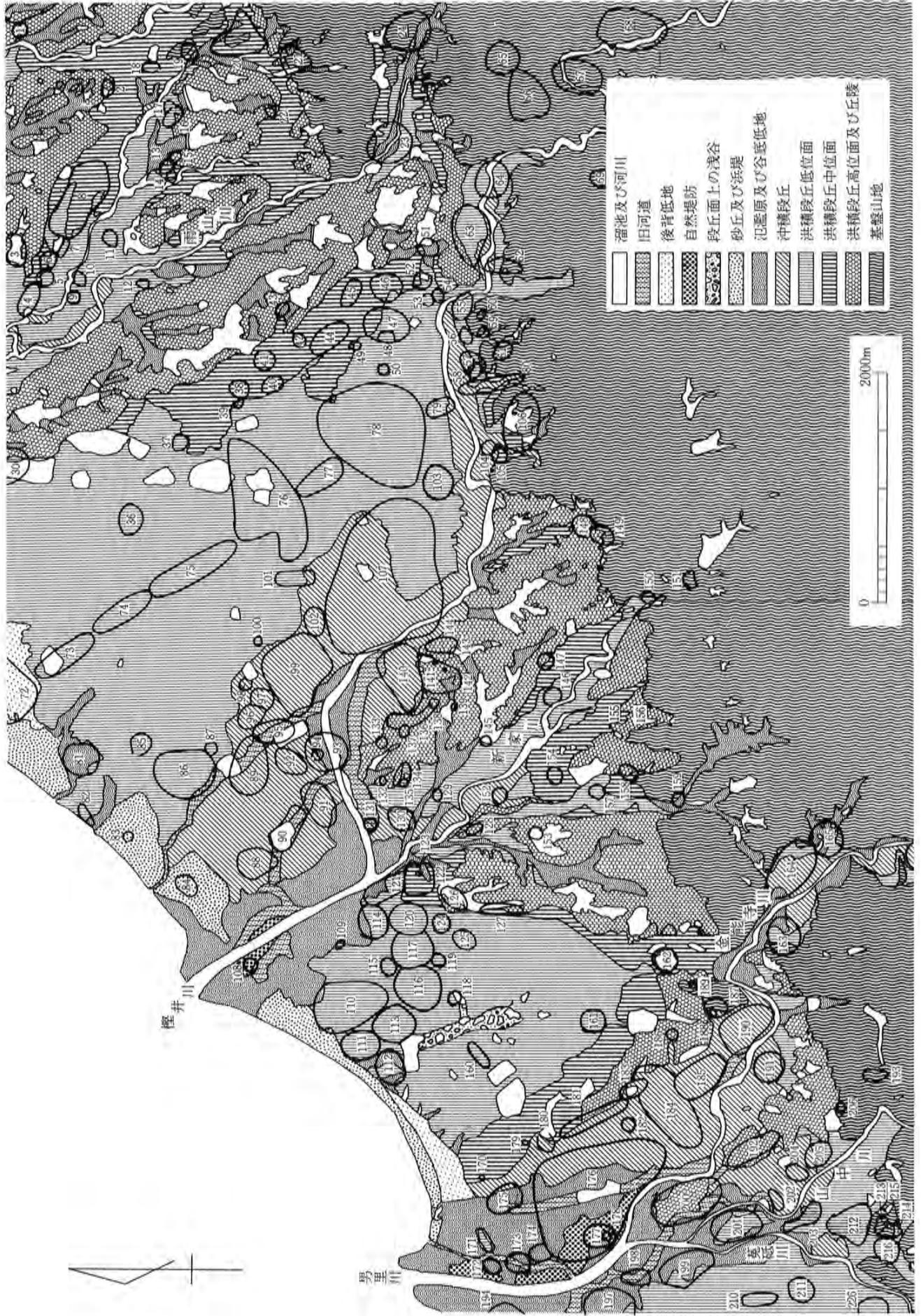
S e n n a n M u n i c i p a l B o a r d o f E d u c a t i o n ,

O s a k a , J a p a n .

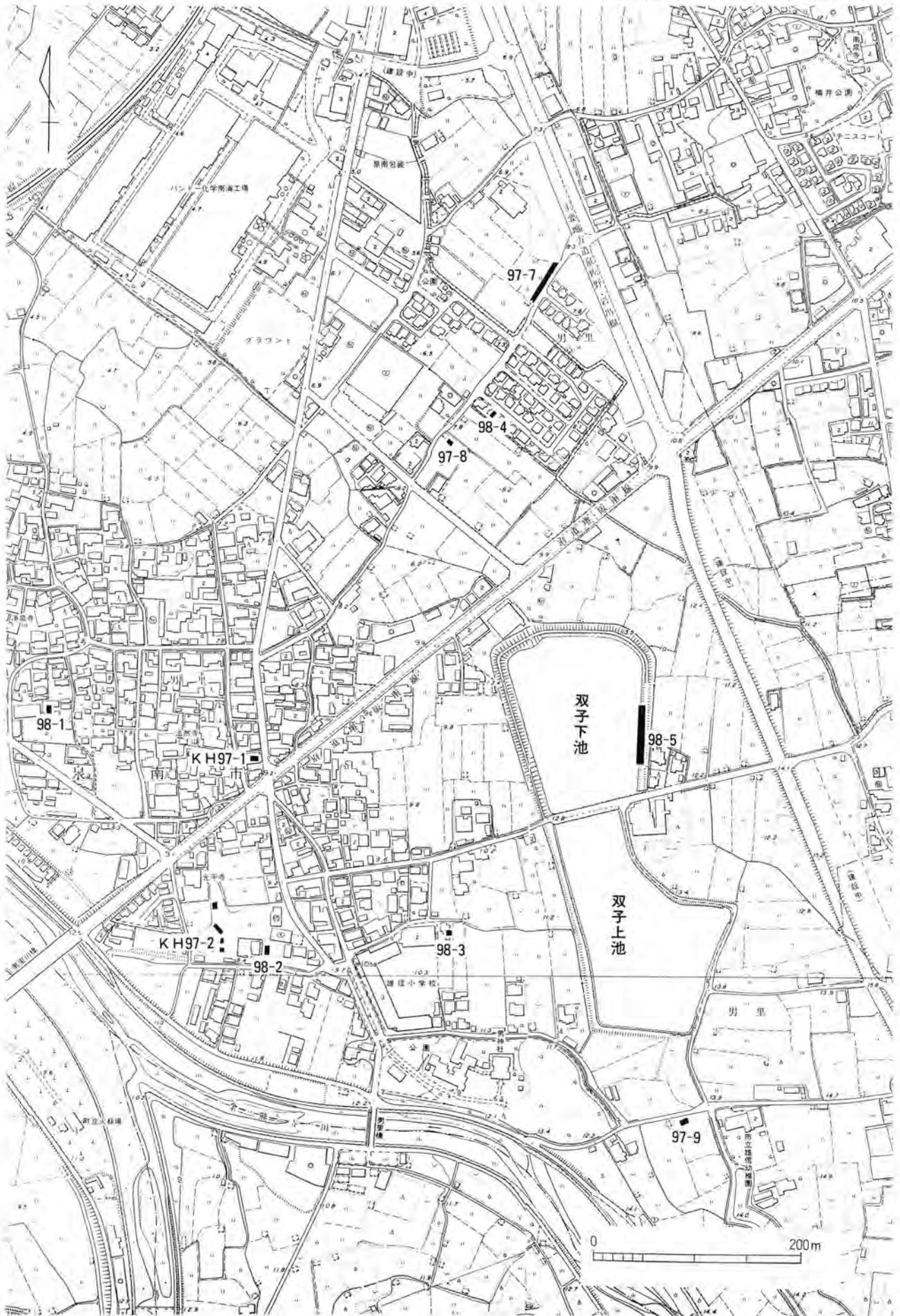
M A R C H , 1 9 9 9

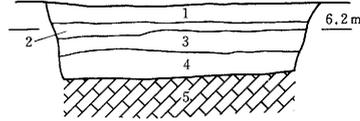
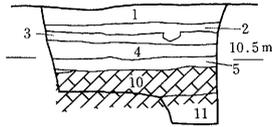
版 図





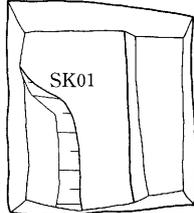
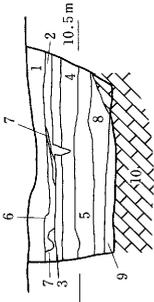
PL.3 男里遺跡・光平寺跡調査区位置図





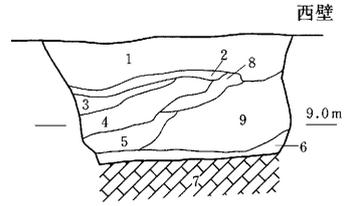
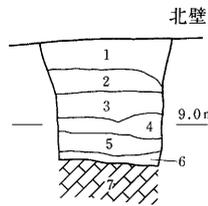
1. 旧耕作土 (下部に円礫含む)
2. 褐色混じり淡灰色土
3. 灰色混じり暗褐色土
4. 灰色混じり明褐色土 (堅く締まる)
5. 灰色混じり明褐色粘質土

ON98-1区北壁断面図



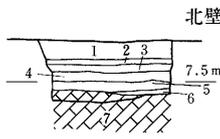
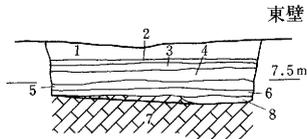
1. 盛土
2. 灰色土
3. 灰白色混じり明褐色土
4. 灰白色混じり淡褐色土
5. 灰白色混じり暗褐色土
6. 黄色混じり暗灰色土
7. 暗黄色土
8. 暗灰褐色粘質土 (マンガン粒含む)
9. 暗灰褐色礫混じり砂質土 (SK01)
10. 暗褐色礫混じり土
11. 暗灰褐色砂質土

ON98-3区平面図及び断面図



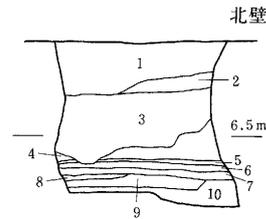
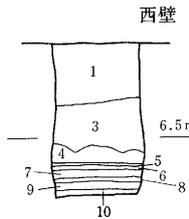
1. 盛土
2. 暗黄褐色砂質土
3. 黒灰色混じり暗黄色土
4. 暗褐色混じり灰褐色砂質土
5. 暗灰黄褐色粘質土
6. 暗茶褐色混じり灰褐色粘土
7. 暗青灰色砂礫
8. 暗黄色砂質土
9. 暗黄褐色土

ON98-2区断面図



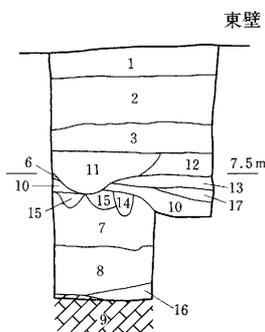
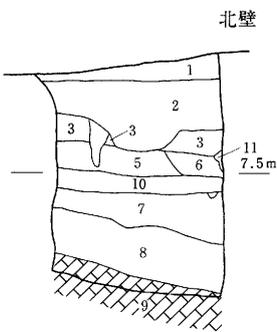
1. 灰黒色土
2. 暗橙色シルト
3. 灰褐色混じり暗黄褐色土
4. 暗黄褐色混じり灰褐色土 (マンガン粒含む)
5. 黄褐色混じり灰褐色シルト (マンガン粒含む)
6. 灰褐色混じり暗黄褐色粘土
7. 暗灰褐色砂礫
8. 灰褐色混じり淡褐色粘土

ON97-8区断面図



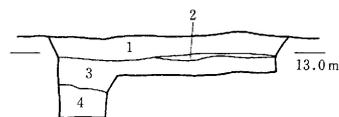
1. 淡褐色土
2. 青緑色礫混じり土
3. 暗青灰色砂礫
4. 青灰色混じり淡黒灰色土
5. 黒灰色砂質土
6. 暗黄色混じり緑灰色シルト
7. 淡黒灰褐色シルト
8. 黄褐色混じり暗褐色砂
9. 淡灰褐色砂
10. 淡灰褐色混じり暗黄褐色砂

ON98-4区断面図



1. 盛土
2. 整地土
3. 暗灰茶褐色土
4. 暗青灰色粘土
5. 灰褐色混じり淡茶褐色土
6. 淡黄褐色砂質土
7. 暗褐色粘土
8. 淡灰黄褐色粘土
9. 淡黄褐色砂礫
10. 淡茶褐色砂質土 (炭含む)
11. 淡灰褐色シルト (炭含む)
12. 淡灰黄褐色シルト
13. 灰黄褐色土 (炭含む)
14. 暗褐色混じり灰黄褐色粘質土
15. 黄褐色混じり淡茶褐色粘質土
16. 黒褐色混じり淡黄色粘質土
17. 淡黄褐色粘質土

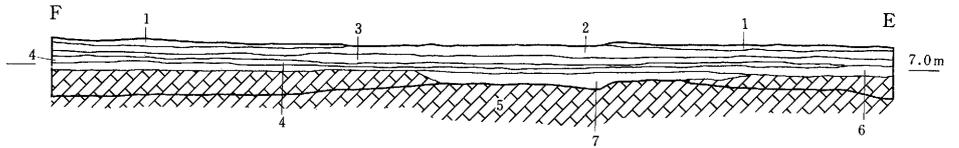
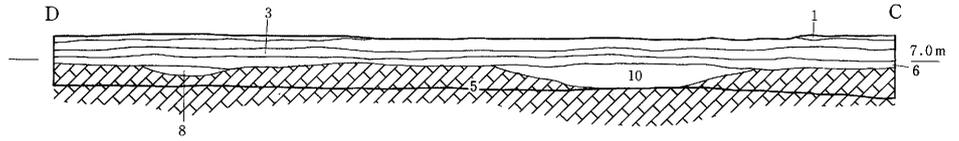
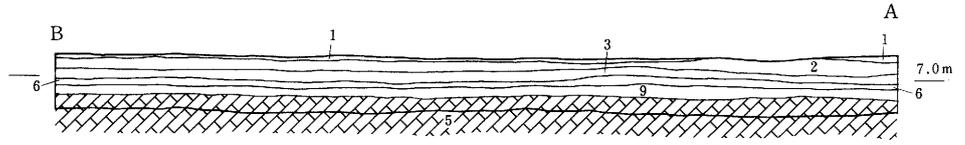
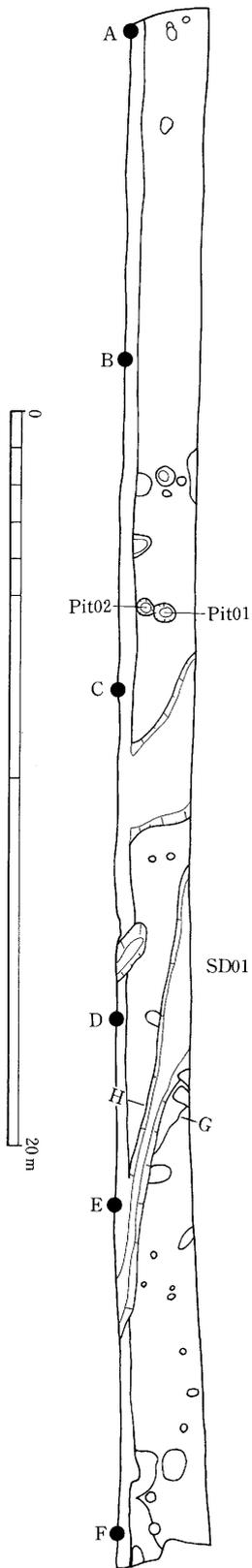
KH97-1区平面図及び断面図



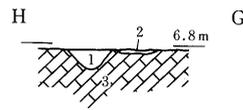
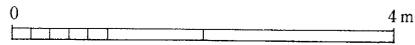
1. 耕作土
2. 灰色土
3. 褐色混じり淡黄色土
4. 褐色砂礫

ON97-9区南壁断面図



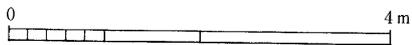


- | | |
|-------------|---------------|
| 1. 耕作土 | 6. 灰褐色土 |
| 2. 明黄褐色土 | 7. 黑褐色土 |
| 3. 明褐色土 | 8. 黑褐色土 |
| 4. 灰褐色土 | 9. 淡黑褐色混じり褐色土 |
| 5. 明褐色礫混じり土 | 10. 暗灰色礫混じり土 |

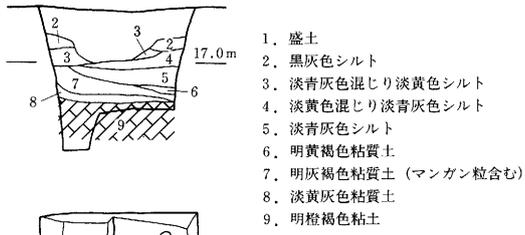


- | |
|-------------|
| 1. 黑褐色粘質土 |
| 2. 淡黄褐色土 |
| 3. 明褐色礫混じり土 |

SD01断面図



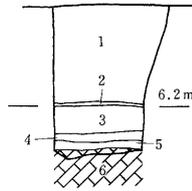
PL. 6 長山遺跡・戎畑遺跡・本田池遺跡・大苗代遺跡・岡田遺跡調査区



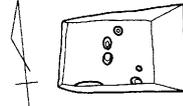
1. 盛土
2. 黒灰色シルト
3. 淡青灰色混じり淡黄色シルト
4. 淡黄色混じり淡青灰色シルト
5. 淡青灰色シルト
6. 明黄褐色粘質土
7. 明灰褐色粘質土 (マンガン粒含む)
8. 淡黄灰色粘質土
9. 明橙褐色粘土



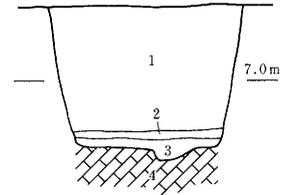
ONS98-1区平面図及び断面図



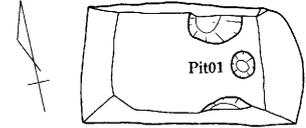
1. 盛土
2. 灰色粘質土
3. 灰褐色シルト
4. 茶褐色粘質シルト
5. 黒褐色粘質シルト
6. 暗黄褐色粘質シルト



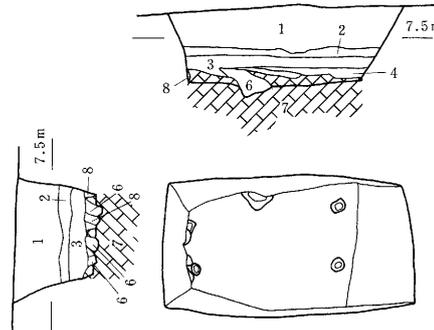
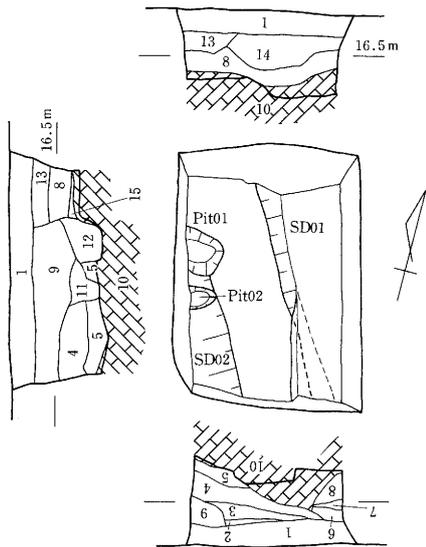
EB97-17区平面図及び断面図



1. 盛土
2. 灰褐色土
3. 黒褐色粘質土
4. 暗褐色土



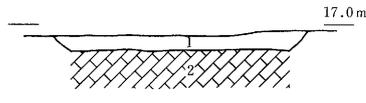
EB98-1区平面図及び断面図



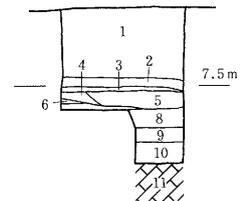
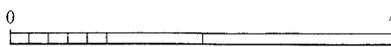
1. 盛土
2. 暗灰色土
3. 淡褐灰色砂質土
4. 淡灰褐色土
5. 淡灰褐色混じり暗黄褐色土
6. 淡褐色混じり淡灰褐色土
7. 淡暗黄褐色粘質土
8. 淡灰褐色混じり暗褐色土

EB98-2区平面図及び断面図

1. 盛土
2. 暗橙色混じり暗灰褐色土
3. 暗黄褐色混じり暗灰褐色土 (マンガン粒含む)
4. 暗黄褐色混じり暗灰褐色砂質土 (マンガン粒含む)
5. 暗灰褐色粘質土
6. 淡灰褐色砂質土
7. 淡黄褐色混じり淡灰褐色土
8. 暗褐色混じり灰褐色砂質土
9. 暗白色砂
10. 灰褐色混じり淡黄褐色シルト
11. 灰橙色礫混じり暗灰褐色砂質土
12. 淡黄褐色混じり暗灰褐色砂質土
13. 淡灰白色混じり暗灰褐色土
14. 淡灰褐色混じり明黄褐色粘質土
15. 淡灰褐色砂質土



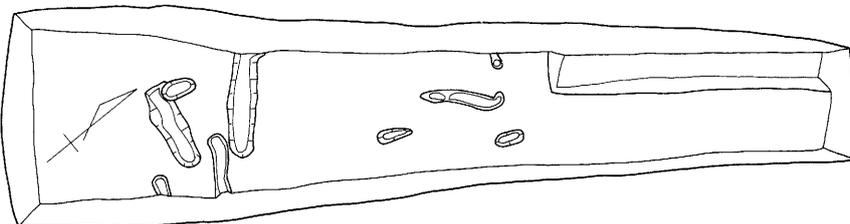
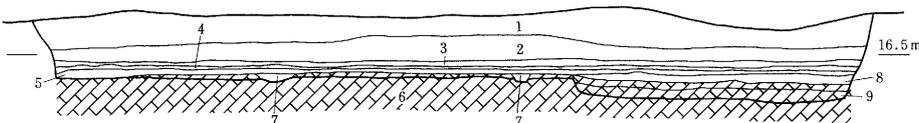
NG98-1第2トレンチ
北壁断面図



1. 盛土
2. 灰黒色土
3. 灰褐色混じり淡黄褐色粘質土
4. 灰白色粘質土混じり淡灰褐色砂質土
5. 青灰色シルト
6. 灰白褐色土
7. 淡褐色シルト
8. 青灰色砂礫混じりシルト
9. 淡青灰色砂質土
10. 淡青灰色粘土
11. 青灰色礫混じり土

OKD97-8区西壁断面図

NG98-1第1トレンチ平面図及び断面図



1. 盛土
2. 灰色シルト
3. 淡灰色混じり暗褐色粘質土
4. 暗褐色混じり淡灰褐色土
5. 暗灰褐色混じり暗黄褐色土 (マンガン粒含む)
6. 淡褐色混じり暗黄褐色粘質土 (マンガン粒含む)
7. 淡灰褐色シルト (マンガン粒含む)
8. 淡灰褐色混じり暗黄褐色砂質土
9. 褐色混じり灰白色粘土

HN98-1区平面図及び断面図



98-1区
(西から)



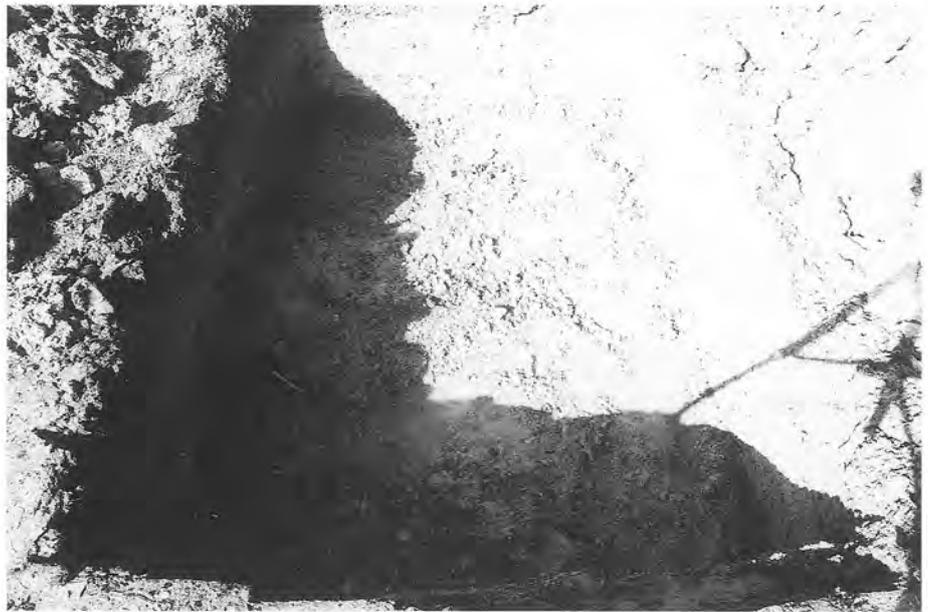
98-2区
(北から)



98-3区
(南から)



98-4区
(西から)



97-8区
(南から)



97-9区
(東から)



全景 (北から)



全景 (南から)



SD01
(西から)



Pit01・02
(東から)



土層断面
(東から)



KH97-1区
(西から)



NG98-1区第1トレンチ
(南から)



同第2トレンチ
(南から)



98-1区
(北から)



98-2区
(南から)



97-17区
(東から)



炭窯全景
(北から)



同詳細
(東から)



炭窯内部
(西から)



HN98-1区
(南から)



ONS98-1区
(西から)



OKD97-8区
(東から)



報告書抄録

ふりがな	せんなんしいせきぐんはつくつちょうさほうこくよ 16							
書名	泉南市遺跡群発掘調査報告書							
副書名	—							
巻次	Ⅺ							
シリーズ名	泉南市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第三十二集							
編著者名	仮屋喜一郎・岡田直樹・石橋広和・岡 一彦・城野博文・河田泰之・大野路彦							
編集機関	泉南市教育委員会							
所在地	〒590-0592 大阪府泉南市樽井一丁目1番1号 TEL.0724 (83) 0001							
発行年月日	西暦1999年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ ー ド		北 緯	東 経	調 査 期 間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺 跡					
おのさと 男里遺跡	大阪府泉南市 男里	27228	ON	34度 21分 35秒	135度 15分 40秒	98-1 199804 98-2 199809 98-3 199806 98-4 199810 97-7 199801 97-8 199801 97-9 199809	5 4 5 2 101 5 4	住宅新築 住宅新築 住宅新築 住宅新築 道路 農業用倉庫 住宅新築
こうへいじあと 光平寺跡	大阪府泉南市 男里	27228	KH	34度 21分 30秒	135度 15分 40秒	97-1 199803	4	住宅新築
ながやま 長山遺跡	大阪府泉南市 馬場	27228	NG	34度 21分 30秒	135度 16分 05秒	98-1 199810	16	共同住宅
えびばた 戎畑遺跡	大阪府泉南市 樽井	27228	EB	34度 21分 56秒	135度 15分 39秒	98-1 199810 98-2 199806 97-17 199803	3 4 2	住宅新築 集会所 住宅新築
わらずばた 童子畑遺跡	大阪府泉南市 信達童子畑	27228	WR	34度 19分 28秒	135度 17分 12秒	98-1 199807	38	道路
ほんだいいけ 本田池遺跡	大阪府泉南市 樽井	27228	HN	34度 22分 04秒	135度 16分 45秒	98-1 199804	15	事務所
おのしろ 大苗代遺跡	大阪府泉南市 信達大苗代	27228	ONS	34度 22分 13秒	135度 17分 12秒	98-1 199806	4	住宅新築
おかだ 岡田遺跡	大阪府泉南市 岡田	27228	OKD	34度 22分 39秒	135度 16分 45秒	97-8 199803	3	住宅新築

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
男里遺跡 98-1 98-2 98-3 98-4 97-7 97-8 97-9	生産 生産 集落	中世 近代 不明 不明 奈良～平安 不明 不明	土坑 溝、土坑、 ピットなど	瓦器 土師器など	安定した地山面を確認 霞提の整地を確認 集落範囲の拡大
光平寺跡 97-1	集落	中世～近世		陶磁器、 土師質土器など	刻印のある土師質「瓦漏」 の出土
長山遺跡 98-1	生産	中世	溝、ピット		
戎畑遺跡 98-1 98-2 97-17	集落	中世 不明 不明	土坑、ピット ピット 土坑、ピット		
童子畑遺跡 98-1	生産	近代	炭窯	軒平瓦、炭など	市域初の近代の炭窯を 確認
本田池遺跡 98-1	生産	近世	鋤溝		
大苗代遺跡 98-1	集落	中世	ピット		集落範囲の拡大
岡田遺跡 97-8		不明			

泉南市遺跡群発掘調査報告書XVI

泉南市文化財調査報告書 第32集

1999年3月31日

編集 大阪府泉南市教育委員会

発行 泉南市樽井1丁目1番1号

TEL. 0724-83-0001

印刷 小笠原印刷株式会社

